



# JAAGAだより

日米エアフォース友好協会  
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行: 日米エアフォース友好協会  
〒160-0002  
東京都新宿区四谷坂町9番7号  
ZEKS 四谷坂町ビル3F  
編集: JAAGA 事務局  
印刷: 東伸社  
ホームページ: <http://www.jaaga.jp/>

## 「つばさ会/JAAGA訪米団」AFA総会参加等報告 TSUBASA-KAI and JAAGA members participate in AFA general meeting

### 1 全般

「つばさ会及びJAAGA代表団を米国に派遣し、空軍を主とする米国防関係者との意見交換及び交歓行事を通じ、日米安全保障体制の強化及び日米友好の増進に寄与するとともに、参加者の識見の向上を図ること」を目的としたJAAGA訪米団派遣が開始されて以来、今年で通算21回目を数えることとなった。

今回は、齊藤会長を団長とする会員12名が令和元年9月9日から20日までの間、ハワイ州、コロラド州及び首都ワシントンD.C.において、元在日米空軍部隊指揮官及び現職米軍高官等との交流及び意見交換等を実施した。

昨年は派遣期間短縮の観点から、それまで実施していた米統合軍及び米空軍部隊等の研修を見送ったが、本年は、防衛大綱及び中期防の策定に鑑み、特に宇宙領域における米軍関連部隊の改編動向並びに将来ビジョン等を把握するために部隊等の研修を復活させ、コロラド・スプリングスに所在するピーターソン空軍基地(Peterson AB)及びシュリーバー空軍基地(Schriever AB)を訪問し、オショネシー北方軍司令官(Gen Terrence J. O' shaughnessy)及びレイモンド宇宙軍司令官(Gen John W. Raymond)を表敬の上、主要幹部等との意見交換に臨んだことが特徴である。

また、我が国の安全保障に関わりが深くハワイに司令部がある太平洋空軍の訪問、ワシントンD.C.における米空軍協会(AFA)主催の講演、パネル・ディスカッションの聴講及び米軍高官との意見交換に関しては、例年同様に実施することができた。

なお、訪米期間中の天候にあっては、昨年ハワイにおいて大型ハリケーンの影響を受けスケジュールの変更を余儀なくされたが、今年は出国直前に関東を直撃した台風15号による影響が懸念された程度で、米国内での

研修行動は一貫して好天に恵まれ、計画どおりに進捗し所望の成果を得ることができ、今次の訪米目的を十分に達成したと考える。

### 2 訪問先別

#### (1) ハワイ州(9月9日～11日)

ホノルルにおいては、米太平洋空軍司令部によるコマンド・ブリーフィング(①太平洋空軍(PACAF)の戦略、②弾道ミサイル防衛態勢、③宇宙とサイバー両領域における取組み、④F-35プログラム)を受けた上で、着任して2年目を迎える米太平洋空軍司令官・ブラウン大将(Gen Charles Q. Brown Jr.)との間では、我が国としての関心事項を中心に活発な意見交換を行い、太平洋空軍戦略、その戦略課題、さらには課題解決のための優先事項を確認することができた。同司令官主催の懇親会の中で、着任以降の活動状況、西太平洋諸国に対する情勢認識を語っていたのが印象的であった。

加えて、今回は初めての企画としてイーグリス・アショア及びSPY-6の関連施設をカウアイ島で研修した。この経験は今後とも我が国における同装備品の導入、換装



JAAGA members made a courtesy visit to Gen Brown, Commander of PACAF

### ～ 「第57号」 目次 ～

訪米団AFA総会参加等報告……………1	現役隊員の皆様へ……………15	横田基地日米友好祭……………30
レッド・フラッグ・アラスカ参加隊員激励……………8	スペシャルオリンピックス支援……………16	寄稿募集のご案内……………31
米軍嘉手納基地第18航空団司令官交代……………9	令和元年度横田基地研修……………18	JAAGAグッズ紹介……………31
米空軍士官学校交換留学生の日光研修……………10	SPORTEX 19A……………26	新入会員紹介……………31
日米相互特技訓練激励・支援……………12	米空軍中将航空自衛隊勤務だより……………28	会員募集、編集後記……………32

に伴う動向を注視していく上で、大いに参考となった。

一方、従来から計画していた米太平洋軍司令官・デビッドソン大將(Adm Philip S. Davidson)の表敬、司令部におけるコマンド・ブリーフィング及び主要幹部との意見交換については、同司令官等の不在により出国直前に中止となったのは残念であった。

なお、9日のホノルル到着直後に、マキキ日本人墓地、パンチボール国立太平洋記念墓地を訪れ献花及び参拝を行うとともに、11日ホノルルを離れる直前には、太平洋空軍が推薦する史跡研修プログラムとして、パールハーバーに所在する太平洋航空博物館及び戦艦ミズーリを見学した。

**ア 米太平洋空軍司令官・ブラウン大將主催の夕食会(9月9日)**

開催にあたり、同司令官からは、「着任して1年余り、インド太平洋諸国を歴訪、意見交換を重ねる中で相互理解を深めることの重要性を認識。訪問国は、フィリピン、マレーシア、ベトナム等のASEAN諸国、インド、そして



Gen Brown held a welcome dinner and talked a lot with JAAGA members

日本や韓国と多岐にわたっている」等の挨拶がなされた。懇談中にも「F-35に代表される第5世代の装

備品は、ネットワークによる情報共有能力に優れており、PACAF司令官として大まかな判断を示し、現場のオペレーターが、状況に応じた最適な判断を行うことが理想である」といった最新装備を駆使する上での大規模部隊の指揮に関する存念を窺い知ることができた。

**イ 米太平洋空軍司令官・ブラウン大將表敬(9月11日)**  
司令部幕僚によるブリーフィング内容は以下のとおり。



Exchanging of views between President Saitoh and Gen Brown based on the meaningful information in the PACAF briefing

○米国の国益はインド太平洋に大きく縛られている。中露という競争相手が主要な焦点だが、大規模自然災害を含む多くの関

心事項にも対応する。

○中国は、「一帯一路」構想の推進、H-6大型爆撃機による西太平洋飛行の常態化等により現状変更を試みている。

○こうした戦略的課題に対して、①戦う前に勝つ(Win before fight)、②何時でも戦える準備をして勝つ(Ready to fight and win)を目標として、同盟の強化、新たなパートナーの勧誘、相互運用性の促進強化等を推進。こうした中、PACAFの優先事項は、迅速な戦闘展開、マルチ・ドメインにおける指揮統制(C2)である。

**ウ PACAF内613AOC(Air Operation Center)研修(9月11日)**

勤務幕僚によるブリーフィング内容は以下のとおり。

○613AOCの任務は、戦域における航空作戦に関して精緻なC2を提供することである。担任地域は地球のほぼ半分であり、容易ではない。

○戦域内の統合空軍種指揮官をはじめとする複数の責任を有するPACAF司令官を適切に支援することが重要。○613AOCの人員規模については、通常数百名であるが、作戦フェーズの段階に応じて拡大・縮小される。

**エ カウアイ島・太平洋ミサイル発射場(PMRF: Pacific Missile Range Facility)研修(9月10日)**

**(ア) イージス・アショア研修**

米ミサイル防衛庁関係者による説明内容の要点は以下のとおり。

○イージス・システムの強みは、ネットワークにある。衛星、航空機、各種レーダーからの情報を一元化して活用している。遠隔交戦が可能で、TPY-2レーダー情報と接続し、射撃統制やミサイル制御ができる。また解体と組立を繰り返すことで移設も可能である。

○日本が導入を決めているイージス・アショアには新型レー



JAAGA members visited the facility of Aegis Ashore System

ダーが採用されている点が、米国等が保有する同種システムと異なる。またBMDに加え、常時対空警戒のための運用に使用するのか、JADGEに接続して陸海空の関係アセットとのネットワークと情報共有するのかが、今後の課題であろう。

○イージス・アショアの運用に必要な体制については、10名程度のクルーにより警戒監視等の運用が可能。24時間連続となると3クルーが必要。さらに継続する場合は、クルーの休息等のために、更に1クルーを追加して計4クルーが必要。

**(イ) SPY-6レーダーの研修**

関係者による説明の要点は以下のとおり。

○ SPY-1 に比べて SPY-6 の整備は短時間である。  
○ SPY-6 は 4 つの電波送受面があり、3 つで運用しつつ 1 つの整備が可能。つまり整備中に運用を停止してしまう SPY-1 と異なり、戦闘中も整備可能で継続運用できる。

○ SPY-1 は BMD 対応時は保有するレーダー能力をかなり使用するのでそれ以外の対空警戒等が不可能であったが、



First visit for JAAGA members to the facilities of "SPY-6" RADAR system

SPY-6 は BMD、対空戦闘、搜索等を同時に行ってもレーダー能力にはまだ余裕がある。

#### (ウ) PMRF Operation Center の研修

関係者による説明の概要は以下のとおり。

○ PMRF の最も大きな任務は、第一に各種試験を行うこと、第二に艦隊の訓練を行うことである。

○ ここでは現役の軍人、民間技術者に加え、部外委託契約者として退役軍人も多く含まれている。

○ PMRF は、水中、水上、空中、宇宙の 4 つのエリアでの射撃試験と評価ができる世界でも類を見ない施設。また、日本に配備された TPY-2 等を含めて米本土西海岸のアセットや西太平洋のアセット等を接続し、太平洋全域での試験が可能となっている。

#### オ 伊藤康一在ホノルル総領事の表敬・夕食会(9月10日)

総領事主催夕食会の席上、伊藤総領事からは、「米太平洋軍司令官は関係国との対話・防衛交流のため、域内において精力的に活動している。こうした安全保障協力を重視しながら、議会に予算取りのアピールを行っている」という米軍司令官の多忙な平素の活動の一端が紹介された。

また、自らの中国勤務経験に基づく「中国を理解する



Commemorative photo with Mr. Ito, Consul General of Japan in Honolulu

には、いわゆる西側的な見方・考え方でなく、中国の歴史に基づかなければならない」との示唆に富む発言を拝聴することができた。

#### (2)コロラド州(9月12日～14日)

コロラド・スプリングスでは、かつて三沢基地司令及び太平洋空軍司令官の職を歴任したオシヨネシー大將が指揮する NORAD (North American Aerospace Defense Command) & US NORTHCOM (United States Northern Command) を訪問。

NORAD が 1950 年代ソ連の核搭載爆撃機の脅威に対処するため、カナダと協定を結び、北米大陸における防空網を形成した経緯を持つ一方、NORTHCOM については、いわゆる「9.11」のテロ攻撃といった非対称脅威から米本土を防衛するという任務からハリケーン「カトリナ」に代表される大規模自然災害救援等まで、あらゆる脅威に対応するために、官民組織間における協力促進を目的とした組織として設立されたとの説明を受けた。

「米本土はもはや聖域ではない」との国防戦略に基づく説明を受け、遠征による戦力投射を旨としてきた米軍(米国)の大きな国家戦略転換が設立当時にあったことをあらためて知らされた感がある。

また、翌日訪問した同じピーターソン空軍基地に所在する AFSPACECOM (Air Force Space Command) & USSPACECOM (US Space Command) では、齊藤団長が現役時代に公私にわたり厚い信頼関係にあったレイモンド大將(元第 5 空軍副司令官)が、我々が訪問する 2 週間ほど前に USSPACECOM と AFSPACECOM のダブルキャップを被る司令官に就任。

司令部におけるコマンド・ブリーフィングから先端の部隊におけるミッション・ブリーフィングに至るまで、「宇宙領域における作戦を完遂することにより、新たな歴史を創る」との気概に沸き立つ部隊の姿を垣間見ることができた。

北方軍及び宇宙軍の研修において共通して実感したことは、両司令官が在日勤務時代に空自と、また異動後も JAAGA と親密な関係を維持しているからこそ、統合軍新設の慌ただしい時期等にも関わらず、重要任務に従事する現場部隊までも研修することができたことである。日米共同体制の充実強化を図っていく上で、相互の信頼醸成がいかに重要であるかを OB になっても痛感した。

#### ア 北米航空宇宙防衛司令部におけるコマンド・ブリーフィング(9月12日)

NORAD & US NORTHCOM に関するコマンド・ブリーフィングの要点は以下のとおり。

○ NORAD の任務は、「国家を防衛するため、航空脅威を抑止、探知、撃破すること」。一方、NORTHCOM は第一に本土防衛、第二に民生支援、第三にセキュリティ協力である。対象とする脅威は、航空脅威だけでなく、非対称脅威から自然災害やテロ等、幅広いものである。  
○ NORAD は米国とカナダの協定に基づいており、編成上、米軍の四つ星司令官の下にカナダの三ツ星副司



Visiting places: (←) USNORTHCOM, (↑) AFSPACECOM, (↗) 50th SPACE WING

令官となる。①大陸地域 ②カナダ地域 ③アラスカ地域の三つを統括している。これに対して USNORTHCOM は統合軍であり、陸・海・空・海兵隊・特殊作戦群等のコンポーネントの隷下部隊を有する。

○両コマンド共に、任務が本土防衛であることは共通であるが、NORAD は主に空と海の領域からの脅威に対する警報を出すこと。対処の責任は USNORTHCOM であつたり、カナダの海軍部隊であつたりする。

#### イ 北方軍によるミッション・ブリーフィング(9月12日)

ここでのブリーフィングは、北米に対する脅威に関する説明であり、説明者が「Homeland is no longer a sanctuary」(米本土はもはや聖域ではない)という言葉をもとに、2018年の米国国防戦略から引用、強調していたことから、米軍自体が米本土に対する脅威に正面から取り組んでいる実態を認識することができた。中でも、北米に対する戦略的脅威が優先順位と共に明確に整理されている内容を理解することができた。

#### ウ 宇宙軍によるコマンド・ブリーフィング(9月13日)

新たに創設されたばかりの USSPACECOM にとって、JAAGA が初めての公式な訪問者であり、コマンド・ブリーフィングも初めて行くことを、レイモンド司令官がブリーフィングの冒頭に発言。また自ら「オペレーション・トモダチ」に参加した経験から、スペースビジネスにおいてもパートナーシップが極めて重要であること、日本との間でホステッド・ペイロードの連携が実現することを大いに期待する旨の付言があつた。同ブリーフィングの要点は以下のとおり。

○USSPACECOM と AFSPACECOM の関係は INDO-PACOM と PACAF の関係と同じである。

USSPACECOM は戦闘コマンド、AFSPACECOM は空軍種の戦闘コンポーネントである。

○USSPACECOM の主任務は「四つの D」、①抑止 (Deter) (宇宙におけるコンフリクトを抑止) ②防衛 (Defend) (米国と同盟国の宇宙領域での自由な行動を防衛) ③提供 (Deliver) (宇宙における能力の提供) ④開発 (Develop) (宇宙における統合構想の開発) である。○従前、宇宙は競争のない平和な領域であつたが、近年戦闘領域となったことが最も大きな変化であり、USSPACECOM は宇宙の脅威に対応できる準備がで

きていなければならない。

#### エ 第50宇宙団におけるミッション・ブリーフィング(9月13日)

関係幕僚によるミッション・ブリーフィングの要点は以下のとおり。

○宇宙優勢を維持するための第50宇宙団の任務は、空軍の衛星制御のためのネットワーク構築をはじめ多岐にわたっており、最近でも新しい任務が付与された。

○既存の各軍種の宇宙軍は、USSPACECOM の下で支援コマンドとして機能するが、今後は各軍種の宇宙軍の一部は USSPACECOM に移管される。現在はその細部が検討されている。

○当団に所属する幹部や下士官の教育訓練については、専門課程を設置している。従来は、宇宙に関連する分野を広く浅く教育してきたが、今後は専門性の高さ、深さが焦点となる。専門家として育成するには15年近くかかる。

#### (3) 首都ワシントン D.C. (9月14日～19日)

ワシントン D.C. においては、到着日の14日の夕刻、吉田正紀(防大23期、元佐世保地方総監)・美貴ご夫妻からご自宅に招いていただき、奥様によるお手製の日本料理を堪能しつつ、防衛駐在官をはじめ空自の在ワシントン地区勤務者等との各種情報交換を行った。翌15日(日)には、エバハート元大将 (Gen Ralph E. Eberhart (Ret.)) がご自宅にて主催された夕食会に、20名を超える JAAGA 名誉会員(米第5空軍司令官又は太平洋空軍司令官経験者で、会長の入会要請に応じて入会を受諾したもの)等と共に出席。和やかな雰囲気の中、日米両空軍種の退役将官等による信頼醸成を図ることができた。

16日から3日間開催された「2019 Air Space Cyber Conference」には、日本で事前に会員登録の手続きを行った上で参加。開催期間中、ウィルソン空軍長官代理のドノバン氏 (Mr. Matthew P. Donovan) による基調講演を皮切りに、ゴールドフィン米空軍参謀長 (Gen David L. Goldfein) の講演、さらにはコロラド・スプリングスで JAAGA 研修を受け入れてくれた USSPACECOM 司令官・レイモンド大将による「宇宙における戦力発揮」を表題とする講演を拝聴するとともに、航空自衛隊の将

来における防衛力運用及び整備に供し得るパネル・ディスカッションを、団員間で手分けしながら情報収集に努めた。

この間、空軍参謀本部・A2、A3、A5、A8の各副部長等とAFA会議場の一角に準備された個室において、15分程度の限られた時間ではあったが、それぞれ所掌する任務に関わる、日本あるいは空自との間に存在する課題等について、幅広く意見交換を実施した。

また、最終日の昼食時を利用して、AFAとの関連が深く、JAAGAメンバーとも馴染みあるミッチェル研究所所長・デプチュラ氏 (Lt Gen David Deptula (Ret.)) との意見交換を実施した。

### ア JAAGA 名誉会員等との交流(9月15日)

毎回、訪米期間中の休日を利用して、JAAGA 名誉会員等との懇親・交歓の場が設けられる。このこと自体が訪米の目的の重要事項にもなっている。この場の参加者は、日米共に年齢の幅が10年以上の差があり、現役時代に一部面識はあるが、共同対処上の実任務において密接に連携した者同士の関係は少ない。しかし、JAAGA 訪米の機会を通じて、旧交を温めたり、新たな個人的な信頼関係が生じたりすることで、両空軍種の円滑な運営に少なからず好影響を及ぼしていることを今回も強く感じた。

今年は、こうした両空軍種将官 OBの交歓の場に、昨年に引き続き現役のレイモンド大将が率先して出席するとともに、岩崎元統幕長夫妻及びグラント米国国防技術保全局長夫妻がゲストとして参加されたことから、まさに世代、退役・現役、個々の立場を超えた信頼関係がさらに醸成されていることを十分に察することができた。



JAAGA Honorary Members and Regular Members held fun exchanges across generations

### イ 米空軍協会 (AFA) 主催の会議関連(9月16日～18日)

#### (ア)ドノバン空軍長官代理による講演(要旨)

○宇宙分野でも大きな成果がある。第六番目の軍種を



JAAGA members attended the AFA Conference

空軍省の下に建設する議論を議会で行っている。2週間ほど前には、レイモンド大将を指揮官とする11番目の戦闘コマンドである USSPACECOM が立ち上がった。2060年の宇宙を見積り、米国が引き続き宇宙におけるリーディング国であり続けるための方策を掲げている。その中で長期的な国家戦略を作るべきとの提言を支持している。

○安全保障環境は最も厳しく、戦略的競争の時代が戻ってきた。米国に対して通常戦力で挑戦しようとするのは間違いであることを気づかせねばならない。しかし、戦略目標を達成するには、

現在の米空軍はとて小さい。今までと同じやり方ではできない。情報の時代であり、AI やビッグデータ等の先端技術を活用して戦いの様相を変えなくてはならない。すべてのセンサーとシューターが接続されたオープン構成のネットワークにより、真のチームワークを実現しよう。

#### (イ)ゴールドフィン空軍参謀総長による講演(要旨)

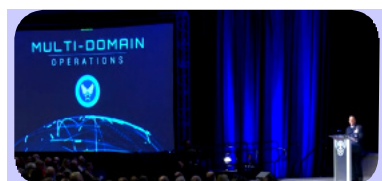
○大統領が宇宙を戦闘領域であると問題提起したことは重要な転換点であった。なぜならば、それまで宇宙における戦闘という言葉が発することができなかったからだ。

○宇宙軍という新たな軍種は、信頼と自信を基礎としながら、独自の文化を創造できるための十分な余地がなければならない。最も肝心のポイントは宇宙と他領域が統合されていることである。

○私は第21代の空軍参謀長としてこの場に立っている。仮に戦争になったとしても必ず勝つという自信を持っている。これは私の前任であるモーズリーやライアンが残してくれた偉大な空軍が存在するおかげである。私の仕事は現在、准将レベルである将来の第24代空軍



Lecture by Mr. Donovan, Under Secretary of the Air Force



Gen Goldfein, Chief of Staff, Air Force, said he was confident of winning battle

参謀長が 2030 年に躊躇なくこの場に立ち、同じ発言（戦闘において 100 %勝利する自信）をさせるための準備をすることである。

#### (ウ) USSPACECOM 司令官・レイモンド大将の講演(要旨)

○我々は、湾岸戦争において初めて宇宙領域の能力を作戦に組み込んだ。その後、紛争だけでなく災害派遣等のすべての活動に宇宙が関与している。これに対して、競争相手も宇宙の能力を進展させている。我々と同じような能力を持つようになり、我々が宇宙で活動することを拒否する能力も保有している。脅威が我々に変化を求めているのである。



Gen Raymond, Commander, USSPACECOM, said the goal was to maintain peace in space and deter invasion

○大統領は、8月29日公式に11番目の戦闘コマンドとしてUSSPACECOMを設立したが、その式典がホワイトハウスで行われたという事実が如何にこの組織が重要であることを物語っている。米国は1985年から2002年にブッシュ政権が解体するまで宇宙コマンドを保有していた。その機能は戦略軍に吸収され、自由になったアセットは米本土防衛を担う北方軍を創るために使われた。

○今日のUSSPACECOM司令官の目標は、宇宙領域を平和に維持し、侵略を抑止することである。しかし、競争相手が衛星破壊機能を持つようになった今、米国は使用可能な衛星を駆使し、衛星を防御できるオペレーターを育成しなければならない。

○USSPACECOMは、SSAデータを提供する民間企業等と緊密に連携することによって、より良い情報を得ようとしている。宇宙領域におけるパートナーシップは極めて重要。官民の連携に加えて諸外国との連携も追求していかなければならない。

○我々は、宇宙における紛争を望んでいるわけではないことを強調したい。我々が行っているのは、ただ紛争を抑止し、これに備えているだけである。我々は常に備えることに集中することで宇宙戦闘を抑止できると信じている。

#### (エ) 米国防長官・エスパー氏(Mr. Mark Thomas Esper)の講演(要旨)

○9.11以降、我々はテロとの戦いを中东で続けてきて低強度紛争(LIC)に慣れてきた。長年にわたって米国が享受した圧倒的な軍事的優位性は新たな競争相手の挑戦により、失われつつある。ロシアは近い将来の脅威であり、現状を力で変更しようとする動きに注意を払わなければならない。

○国家軍事戦略はこれらの挑戦に対して戦うための指標となる。国防省は予算を見直し、事業経費を確保することで抑止できる空軍を目指す。また、大国との戦いのために戦力組成と作戦構想を見直す。そして軍の即応態勢を確立する。これには新領域である宇宙とサイバーが含まれる。マルチ・ドメインの統合ドクトリンと作戦構想を創り上げる。



U.S. Secretary of Defense Esper said the U.S. should be ready to fight in space

○宇宙領域で戦って勝つために、USSPACECOMを創設したが堅実なステップであった。米空軍が独立したように、宇宙軍を6番目の軍種として立ち上げる予定であり、議会の議論に注目している。米国は宇宙において戦える準備ができていなければならない。

#### ウ ワシントン D.C.における米軍高官との意見交換関連(9月16日～18日)

##### (ア) 空軍参謀本部 A2 副部長・ブレイ氏 (Mr. K. E. Bray) との意見交換(要点)

○全ての情報機関は、戦闘軍指揮官を支援しなければならない。そのためには、ストーブパイプ(注:外部からアクセス不可能な機関間の直通情報経路の比喻:生の情報が適切な文脈を伴うことなく提示されるようなケースを指して使われる)を解消し、情報を適切に分析・活用できる環境を構築する必要がある。

○情報活動において、重視事項のうち、第一はクラウド環境を構築すること、第二に収集したデータを分析・活用するプロセスを自動化することである。そのためにはAIの活用が不可欠。

○得られた情報は、最終的に大統領に提供することになる。その際、情報組織内に存在する摩擦や官僚主義を排除する必要がある。

##### (イ) 空軍参謀本部 A5 副部長・フェイ中將(Lt Gen T.G. Fay)との意見交換(要点)

○日米豪の連携は重要であり、コープ・ノース・グアムやレッド・フラッグ・アラスカ等の共同訓練・演習を通じて、相互理解と共同戦術能力の向上を図っていくべきである。

○太平洋空軍司令官ブラウン大将も同盟国との協力の重要性を十分に理解し、B-52による航行の自由作戦を頻繁に行っている。また、第5空軍はまさに日本との共同能力を高めている。

○将来にわたり航空優勢を維持するには、異なるプラットフォームを繋ぎ、情報を共有し、より素早く行動することである。将来戦闘機には個々の性能より指揮統制及びセンサーのネットワーク化による異なるアセットとの連携が重要である。



JAAGA members visited  
 (←) A2:Mr. Bray  
 (↖) A5:Lt Gen Fay  
 (↑) A3:Maj Gen Mack  
 (↗) A8:Maj Gen Kurum (former)  
 :Brig Gen Pringle  
 (→) Mitchell Institute:Lt Gen (Ret.) Deptula



**(ウ) 空軍参謀本部 A3 副部長・マック少将 (Maj Gen Mack) との意見交換(要点)**

○北朝鮮が最近発射している新型の近距離弾道ミサイル対処においても、日本の BMD 能力に期待するところが大きい。イージス艦の配備やイージス・アショアの導入は力強い。

○パイロット要員の採用と飛行訓練による養成は課題。現状は民間航空のパイロット需要が高いため、養成数よりも辞めることによる減耗率が高い。

**(エ) 空軍参謀本部・元 A8 副部長・クラム少将 (Maj Gen Kurum) 及び現 A8 副部長・プリングル准将 (Brig Gen Pringle) との意見交換(要点)**

○空軍参謀長が空軍の飛行隊の数を 386 個(戦闘機、爆撃機、給油機等)に増やすべきと主張しているのは、大国間の競争相手に対応するためである。

○インド太平洋の状況認識に関して、現在の PACAF 司令官等は状況を十分に理解し、適切な発信を行っている。また、エスパー長官が明言したとおり、大国間の競争相手を問題視している。ただし、米国は当該戦域の重要性を理解しているが、イラン、シリア、ロシア等のインド太平洋以外の脅威にも目を向けなければならない。

**(オ) ミッシェル研究所所長・デプチュラ氏 (Lt Gen (Ret.) Deptula) との意見交換(要点)**

同氏との間では、昨年引き続き F-2 後継機に関する日米の最新情勢を相互に確認するとともに、AFA シンポジュームの主なテーマでもあるマルチ・ドメイン作戦の意義、概念等について昼食をとりながらの意見交換を実施した。

**エ 杉山晋輔駐米大使の表敬(9月16日)**

杉山大使から米国事情を伺う中であって、レイモンド司令官並びに令夫人を人物として高く評価されていることから、国家の安全保障をつかさどる軍人に厚い信頼感を持たれていることを知り、大使自身の人柄に感銘を受けた。

また、日米同盟の現状についても「本音で話ができる関係」になりつつあるとのコメントを拝聴し、今後とも磐石

の同盟に向けて双方首脳の手腕に期待したい。

**3 結びに**

全行程 12 日間にわたる濃密なスケジュールの中、米空軍の将来ビジョン、各軍司令官等による情勢認識、任務遂行上の基本姿勢に触れることで、あらためて我が国の国家安全保障戦略の見直しの必要性を実感するとともに、この訪米を通じてその資を得たと考える。また、今後領域横断作戦を効果的に遂行するために、防衛省自衛隊とりわけ航空自衛隊に求められる方向性について幾つかの視点をえた感があり、識見の向上につながった。

かかるように、この訪米事業が多大な成果を収め無事に終了し得たのは、出発に先んじた航空幕僚監部関係各課からの米国情勢等に関するブリーフィング及び空幕渉外班からの便宜供与等にかかわる支援、また現地支援にあつては、在ホノルルの米太平洋空軍連絡幹部・倉地1佐をはじめ橋本2佐、山田2佐、藤島3佐、在コロラド・スプリングスの藤本3佐(空軍士官学校勤務)、そしてワシントン D.C.では防衛駐在官の鈴木1佐及び廣瀬2佐から多大な支援をいただいたおかげであり、訪米団一同、あらためて心から御礼申し上げる次第である。

(福江理事記)



JAAGA members paid a courtesy visit to Mr. Shinsuke Sugiyama, Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan to the United States of America, at his residence

レッド・フラッグ・アラスカ参加隊員を激励  
JAAGA cheers Koku-Jieitai participants to Red Flag Alaska 19-2



On 29 May, 2019, JAAGA Chairman Kiyofuji, Director Ono and Asai called on  
(←)Lt Gen Muto, Commander of Air Defence Command & Lt Gen Kanenko VC/ADC in Yokota AB  
(→)Lt Gen Yamada, Commander of Air Support Command & Maj Gen Nishitani, VC/ASC in Fuchu AB

5月29日(水)に清藤理事長、小野理事、浅井理事が、13時15分から航空支援集団司令官山田真史空将を、15時30分から航空総隊司令官武藤茂樹空将を訪問し、レッド・フラッグ・アラスカ (RED FLAG-Alaska) 訓練に参加する航空総隊及び航空支援集団の参加部隊を激励し、訓練の成功を祈念した。

両司令官から「JAAGAからの激励に参加隊員を代表し心から感謝申し上げます」との感謝の意が表せられた。

武藤総隊司令官からは「今回の訓練には初めて第3航空団のF-2が参加する。準備も着々と進んでおり、大いなる成果を期待したい」とのコメントがあった。

また、山田支援集団司令官からは「今回は訓練参加者全員に各々の目標を定めさせ、より充実した訓練になるよう準備させている。素晴らしい訓練となるよう期待してい

る」とのコメントがあった。

本訓練は、米空軍が実施する多国間演習に参加し、日米共同訓練を実施することにより、部隊の戦術技量及び日米共同対処能力の向上を目的とし、5月27日(日)～6月29日(土)の期間(展開、撤収を含む)、アメリカ合衆国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレメンダルフ・リチャードソン統合基地並びに同周辺空域等において実施された。航空総隊から第3航空団(三沢)、警戒航空隊(浜松)の人員約260名、F-2A/B×6機及びE-767×1機が参加、航空支援集団から第1輸送航空隊(小牧)の人員約70名、C-130H×2機が参加し、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、戦術空輸訓練が実施された。

(浅井理事記)



Photos by Koku-Jieitai

Col Ota, Commander of the dispatched training unit for “RED FLAG”, Air Support Command, received JAAGA support goods. We hope them for great success



## 米軍嘉手納基地第18航空団司令官の交代 The 18th Wing welcomes New Commander on 8 July



The 18th Wing Change of Command ceremony was administered by Lt Gen Schneider

7月8日(月)、嘉手納基地において、在日米軍司令官兼第5空軍司令官シュナイダー中將(Lt Gen Kevin B. Schneider, Commander, U.S. Forces Japan and 5th Air Force) 主催による第18航空団司令官の交代式「Change of Command」が挙行された。

同式典は、嘉手納基地特殊作戦群格納庫で行われ、外務省沖縄担当大使、沖縄防衛局長、沖縄県副知事及び周辺自治体の長、航空自衛隊からは南西航空方面隊司令官上ノ谷寛空将ご夫妻、第9航空団司令稲月秀



President Saitoh, Lt Gen Kaminotani, Commander of Southwestern Air Defense Force and his wife, Maj Gen Inatsuki, Commander of 9th Air Wing and some Jieitai members attended the ceremony



Brig Gen Carey, Commander of 18th Wing, and his wife took a commemorative photo with President Saitoh and Mr. Maruno, Head of Okinawa Branch

正空将補、陸海の部隊長、その他基地協力会関係者など多数の招待者が参列した。JAAGAからは、齊藤会長、丸野沖縄支部長が参列した。

来賓歓迎及び紹介、関係者入場、日米両

国国家独唱、祈禱に引き続き、シュナイダー中將が、退任司令官及び新任司令官について紹介するとともに、退任されるカニングハム准将(Brig Gen Case A. Cunningham)に勲章を授与した。

指揮権移譲は、退任されるカニングハム准将から司令官旗がシュナイダー中將に返納され、その後、シュナイダー中將から新第18航空団司令官キャリー准将(Brig Gen Joel L. Carey)に授与され、厳粛裏に終了した。

退任されるカニングハム准将はスピーチにおいて、日本及び周辺自治体、陸海空自衛隊、部下、家族への感謝等を述べた。なお、カニングハム准将は、ハワイ州キャンプ H. M. スミス基地で、米インド太平洋軍の運用副部長に任命される。

新司令官キャリー准将は、参列者への感謝の後、「日本とのパートナーシップ、フレンドシップは極めて重要であり、自由で開かれた太平洋を守るための礎となっている。今後もこのパートナーシップ・フレンドシップをより一層強固なものとし、太平洋地域の平和と安全に寄与したい」と述べるとともに、「ここ沖縄で勤務できることを誇りに思う」と挨拶した。なお、キャリー准将は、アフガニスタン・カブールの第438航空遠征航空団司令官からの着任であり、3回目の嘉手納基地勤務である。

式典後の下士官クラブにおけるレセプションでは、新司令官ご夫妻が招待者一人一人と挨拶を交わすとともに、気さくに記念写真に応じる等、和やかな雰囲気であら交流していた。  
(丸野沖縄支部長記)



Brig Gen Joel L. Carey, Commander, 18th Wing

## 米空軍士官学校交換留学生の日光研修 JAAGA supports USAF Cadets' Nikko Tour on 28-29 September

9月28日(土)から29日(日)にかけて、米空軍士官学校から防衛大学校に留学している米空軍軍人3名(Aoyama 候補生、Jade LY 候補生、Pagel 候補生)を引率して、ホストファミリーを務める吉田、岩本理事及び空自 OG の肥田木夫妻は JAAGA が主催する日光研修を実施した。



Bright morning snapshot at Tokyo station  
(from left) Camaren Jade LY, Shinryu Aoyama, Benjamin Pagel

28日(土)朝、JR東京駅を集合場所としていたところ、東京駅丸の内口改札付近は、規制が敷かれ物々しい雰囲気であった。留学生達はその規制にちょうど会い、改札寸前でロープにより立止めされ、何のため

の規制なのかが判らないまま最前列に立ちすくんでいた。なんと彼らの目の前に現れたのは天皇・皇后両陛下であった。茨城国体開会式ご出席のための移動に偶然にも出くわすという、ビッグサプライズの出発となった。

東京駅から留学生が憧れていた新幹線で移動した。車内では、留学生の生い立ち、8月の来日からわずか数週間の間に留学生のみで行った富士山登山のエピソード、今後12月までの日本滞在間の行動予定などを話して宇都宮駅に到着した。

宇都宮駅では、堀川典子様(JAAGA個人賛助会員高柳實様のご息女)、佐藤真紀子様(宇都宮海星女子学院教諭で堀川様の従妹)及び宇都宮海星女子学院の生徒3名が星条旗を手に出迎えて下さった。生徒達



High school girl students welcomed exchange cadets at JR Utsunomiya Station



Commemorative photo at Nikko Toshogu Shrine, a World Heritage Site

は全員が英会話部所属で、今回の研修支援を待ち焦がれていたとのことであった。

駅近くのホテル内のレストランで昼食をとり、2台の借り上げ車両に分乗し最初の研修地である「輪王寺」、世界遺産「日光東照宮」、「憾満ヶ淵の化け地蔵」を見学した。

生徒達は、海外での生活や留学経験を有しており英語も堪能で、事前に各観光名所の下調べをしたファイル片手に英語で2日間、本研修の支援をしてくれた。留学生達は、マンツーマンで対応してくれる生徒達と息も合い、リラックスして研修を楽しんでいた。

その後、再び宇都宮市内の宿泊先ホテルへ移動し、ホテルで生徒達と別れた。

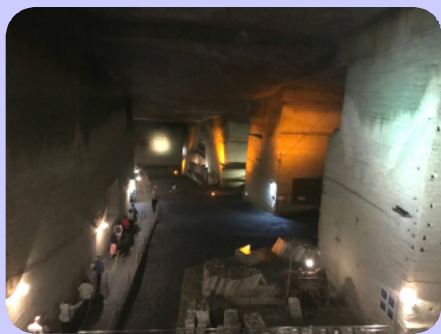
夕食会は市内のロール寿司で有名なレストランにおいて、高柳様ご夫人、堀川様ご主人及び宇都宮海星女子学院教頭の石塚千恵様を加えて行われた。ロール寿司だけではなく、栃木牛など留学生達が初めて口にする食材を使ったおいしい料理に会話が弾んだ。留学生達は「日光東照宮」について、杉並木に囲まれた境内は日常生活とはかけ離れた別次元の世界であり400年前とほぼ同じという不変の世界に独特な雰囲気を感じた、という印象を持ったそうである。また、操縦資格を持つ堀川



Dinner with Mrs. Takayanagi,  
Mr. & Mrs. Horikawa, Mrs. Sato, Mrs. Ishizuka

様が女性操縦者のみで日本から韓国へフライトした際に、スクランブル発進してきたと思われる韓国空軍機と遭遇した話に、操縦者を狙っている彼らは興味津々に聞き入っていた。留学生達は、在日米軍基地や駐日武官として勤務したい等の留学生たちの夢や目標を語り、高柳令夫人より彼らが将来、米国と日本の懸け橋として活躍してくれることを願っている旨のお言葉を頂戴した。様々な話題に花が咲き、和やかな雰囲気のうちにお開きとなった。

翌 29 日(日)は、宇都宮市郊外に所在する大谷石の産地にある「大谷石資料館」や「大谷地下採掘場跡」等



(↑)At Oya History Museum  
(↓)Group Photo at Heiwa Kannon



を見学した。当初は人力で 30メートルの深さまで石を削り、80kg 以上もある石柱を背負子で背負って運び出していたとの由。戦時中は地下坑内が倉庫や軍需工場として使われ、“疾風”戦闘機のエンジンなどが生産されていた。地下坑内の広さや当時の日本人の忍耐強さと素晴らしさに、留学生たちも驚いていた。最近では、数々の有名な歌手等によるコ

ンサートや映画撮影にも使用されており、坑内の一部はプロジェクションマッピングを使用した映像効果で神秘的な雰囲気を醸し出していた。その後「大谷寺」と「平和観音」を見学し、道の駅で昼食を取った。

午後は宇都宮市郊外の「若竹の杜」を訪問した。近年、広大な敷地に珍しい竹が整然と植林され、映画の撮影にも使用されたことから多くの観光客で賑わっていた。従前は栗の木を植樹し栗を栽培していたが、現在はタケノコを栽培するための真竹や孟宗竹が植樹されてきており、それら栗林、竹林を1時間にわたり散策した。散策の途中、竹林の中の休憩所で提供されたお抹茶に感動するとともに、お抹茶が注がれていた竹の器を持ち帰っていた。一連の研修を終え、宇都宮駅で高柳令夫人、堀川様、佐藤教諭、生徒達による見送りを受けて帰路についた。

東京駅に向かう新幹線の中で留学生達は、「今回の研修は、日本の歴史・文化・伝統・わびさびに触れることができ貴重な体験ができました。アテンドの生徒達との多岐にわたる会話を通じ日本の高校生の考え方も理解でき、大変楽しく有意義でした。これから日米の架け橋となっていく責任や任務の大切さを考えさせられました。本研修を支援して頂いた皆様に心から感謝しています。」と語ってくれた。

本研修を通じて3名の留学生が、日本と日本人に対する理解を一層深め、今後米空軍将校として活躍するとともに、日米の友好関係向上、同盟の強化に貢献してくれることを祈念したい。

この日光研修はひとえに、長年にわたりJAAGA 個人賛助会員である高柳實様のご厚意によるものであり、事前調整から研修実施にあたっては、堀川様、佐藤教諭及び3名の宇都宮海星女子学院生徒の皆さんに多大のご支援をいただきました。改めてこの場を借り、心から感謝します。

(岩本理事記)



Green tea break at Bamboo Forest

## 日米相互特技訓練を激励・支援 JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

7月19日(金)、航空幕僚監部人事教育部長鈴木康彦空将補を、JAAGA 清藤理事長、小野・福永両理事が日米相互特技訓練 (Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program) を激励支援するために表敬訪問した。

人事教育部教育課長藤永国博1等空佐、航空自衛隊准曹士先任横田雅宏准空尉及び教育課個人訓練班西ひとみ1等空曹立ち会いのもと、清藤理事長から鈴木人事教育部長へ激励の目録が手渡され、引き続き懇談が行われた。

日米相互特技訓練は、平成7年度に「第1回日米相互部隊研修」として、第35戦闘航空団(三沢基地)に航空自衛隊員10名(幹部3名、空曹7名)を派遣し日米相互の理解及び友好の深化並びに英語能力向上の動機づけを目的として始められ、平成26年度に現在の「日米相互特技訓練」に名称が変わり、平成27年度に事業化され現在に至っているとのこと。

鈴木人事教育部長から「日米相互特技訓練は年々充実してきており、日米双方の参加希望者や希望する部隊も増え、相互の理解及び友好の深化に貢献している。また航空自衛隊がF-35部隊建設を進めていく中で必須の課題である英語能力向上の動機づけとして本訓練の意義は大きく、JAAGAの支援に感謝している」とのコメントをいただいた。JAAGA 清藤理事長からは「本訓練の認知度向上を期待するとともに、現場部隊レベルの相



JAAGA Chairman Kiyofuji, Director Ono and Fukunaga called on Maj Gen Suzuki, Col Fujinaga and WO Yokota, ASO on 19 July 2019 to cheer Koku-Jieitai and NCO participants

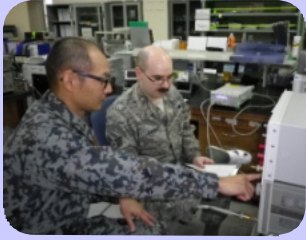
互理解と友好の深化に微力ながら協力していきたい」と激励し、短い時間ではあったが有意義な意見交換が行われた。

今年度は、8月19日～30日の間、航空自衛隊三沢基地において米空軍から10名の下士官を受け入れて実施されるのを皮切りに、大湊分屯基地、防府南・北基地、築城基地及び新潟分屯基地での米空軍下士官の受け入れが計画されている。また、航空自衛隊から米空軍三沢基地、米空軍横田基地及び米空軍嘉手納基地へそれぞれ15名の隊員を派遣しての訓練が計画されている。(福永理事記)

### 令和元年度 日米相互特技訓練スケジュール (空幕教育課提供)

空自受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)	米空軍受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)
三沢基地 (Misawa AB)	2019 Aug.19～30	10	三沢基地 (Misawa AB)	2019 Sep.13～25	15
大湊分屯基地 (Ominato Sub Base)	2020 Jan.20～27	10	横田基地 (Yokota AB)	2019 Oct.17～25	15
防府南・北基地 (Hofu-Minami/Kita AB)	2020 Jan.20～28	7	嘉手納基地 (Kadena AB)	2019 Nov.14～22	15
築城基地 (Tsuiki AB)	2020 Mar. 9～17	10	(参考)日米相互特技訓練のねらい 在日米空軍部隊での訓練を通じて、特技能力を向上させ、実務レベルにおける相互理解を深め、日米相互協力態勢の基盤を強化する。また、航空自衛隊の部隊における在日米空軍下士官の研修を支援し、受け入れ部隊隊員の特技能力向上を図るとともに、日米相互理解及び絆を深め、日米共同対処基盤を強化する。あわせて英語能力向上の動機づけとする。		
新潟分屯基地 (Niigata Sub Base)	2020 Mar. 3～12	10			

**訓練所感 Training Impressions**  
**三沢基地 (Misawa Air Base)**  
**第3航空団整備補給群装備隊**  
**2等空曹 花野 亨**



今回、我々3空団所属隊員12名は8/19～8/30の間、当団において米空軍第35戦闘航空団の軍人10名を受け入れて日米相互特技訓練を行いました。

初日の出迎え時は自分を筆頭に多くの者が緊張しており、司令部玄関から講堂までの道のりがとても長く感じたことを今でもはっきりと覚えています。

夕方にはアイスブレイカーが行われました。参加者の中には日本に転属してきて半年程の方もいて、「箸」や「いなり寿司」に「日本酒」と、初めてづくしの日本の食事に舌鼓を打ちながら楽しみました。そこではお互いの食文化を紹介しあったりと、和やかに打ち解けあうことができました。

2日目は各群の担当者による概要説明が行われ、組織の相違点等を学ぶことができました。休憩時間には2チームに分かれ伝言ゲームをしたのですが、そこでは珍回答「ん～、チョップ！」が生まれ、その後の訓練ではその珍回答をキーフレーズに大いに盛り上がりました。

3日目から6日目は特技ごとに所属部隊へ戻り、特技訓練を行いました。共通特技ということもあり、訓練はとてもスムーズに進み、予定していたプログラムも滞りなく終えることができました。その中で、日米それぞれの手順を紹介しあい比較することにより、お互いの考え方の違いを知ることができ今後の参考となりました。これらの訓練には自衛隊と米軍からそれぞれの先任も参加し、特技を超えた交流も見られました。

7日目から9日目の訓練にかけては基地内外の自衛隊部隊を見学し、自分達の特技を超えて見聞を広めました。部隊見学の中で各自の特技が各部隊の運用にどのように関わっているかを米軍に紹介しつつ、各隊員の持つ職務が組織運用の中でかけがえのない歯車の一つであることを改めて認識しました。

9日目の午後には体育訓練「剣道」を通じて日本の武道を学びました。普段、膝を折り曲げて座ることのない彼らは「正座」や「蹲踞(そんきょ)」に苦勞しながらも、凛とした眼差しと鋭い掛け声(時々、悲鳴?)をもって訓練に臨んでいました。訓練開始時には竹刀の持ち方もままならない初心者でしたが、訓練終了時には竹刀の空を斬る音がいたる所から聞こえ、訓練の成果を肌で感じる事ができました。

この日の夜にはフェアウェルパーティーが行われました。午後の訓練「剣道」のほどよい疲れと喉の渇きを癒すべく、盛大な乾杯の掛け声のもとジョッキが交わされ、初日の緊張はどこへやら、宴は終始大盛り上がりでした。ここでもキーフレーズ「ん～、チョップ！」は健在でいたるところから聞こえてきてその度に大きな笑い声が聞こえてきました。

最終日は部隊長を表敬し訓練の成果や思い出を全員で共有しました。特に団司令からの「今回の訓練で得られた最大の成果はなんですか？」の質問に対し、「このパートナーと出会えた事です。」と回答したことに対し全員が深く頷き、ここにいる全てのメンバーが強い絆で結ばれたのだと感動しました。

いよいよ訓練の終了時間が迫り、見送りのために司令部玄関までエスコートしたのですが、初日に感じた道のりの長さとは裏腹に、今回はとても短く感じました。それぞれ、見送りの時間まで別れを惜しみ過ぎました。みんなの顔には緊張の面持ちはなく、充実感に満ち溢れ、訓



(↑)Bilateral F-2 maintenance

(↑)Bilateral fire fighting training

(✓)Bilateral Kendo training

(↓)Bilateral hamburger lunch

(↘)3rd AW members saw 35th FW partners off with strengthened bilateral mind



練の成功を物語っていました。

こうして我々の日米相互特技訓練は幕を閉じたのですが、私にとってこの訓練の終了はフィニッシュラインではなくスタートラインであると考えています。この訓練を機に今後は各特技の交流を深め、個人の付き合いから職場同士の交流に発展させ、ひいては日米共同対処能力の基盤を強化させていきたいと考えています。

最後に、この日米相互特技訓練を計画してくださった関係者各位、そして訓練を支援してくださった日米エアフォース友好協会の皆様にはここから感謝申し上げます。(了)



Commemorative photo of participants with Maj Gen Takahiro Kubota, Commander of 3rd AW, Col Fumihiko Kato, Vice Commander of 3rd AW, Senior Enlisted Advisors of 3rd AW and each subordinating group, as well as two SMSgts of 35FW who are coordinators of this BNEP

### 米軍基地への航空自衛隊員受入れ

令和元年度に計画された米軍受け入れ基地における日米相互特技訓練は、米軍三沢基地において9月13日(金)～25(水)の間、米軍横田基地において10月17日(木)～10月25日(金)の間、米軍嘉手納基地において11月14日(木)～11月22日(金)の間に実施され、それぞれに多岐にわたる特技の15名の隊員(合計45名)が航空自衛隊部隊から参加した。

参加した隊員は、各米軍基地において計画された訓練プログラムに積極的に取り組み、それぞれの特技能力を向上させ、相互理解を深めることができたとのことである。(福永理事記)

(訓練の様子を横田基地及び嘉手納基地のホームページから引用しました。原文でお楽しみください。)

#### 嘉手納基地 (Kadena AB)

from Kadena AB HP

The NCO Bilateral Exchange program consists of U.S. Air Force, U.S. Army, and Japanese Self-Defense Force members coming together to learn and grow. The program paired members from similar career fields, so they could learn how their counterparts operate to accomplish the missions of peaceful development, contingency response and aggression deterrence.

“The purpose of the NCO Bilateral Exchange is to gain insight on how our partners perform their mission and how we perform ours,” said USAF Tech. Sgt. Adrian Lemard, 18th Aircraft Maintenance Squadron crew chief. “For instance, they organize their crew chiefs in a different way compared to us. They’re a lot more specialized in their career fields.”

The program included a historical brief, base tour, mission briefs, physical training, professional enhancement seminars, and worksite visits.

“It was a great time to improve the relations between the Japanese and Americans,” said JASDF Staff Sgt. Shuichiro Masunaga, 6th Tactical Fighter Squadron aircraft general technician. “It’s awesome to see the bond between us. I was able to improve my English and I liked how hands-on the maintenance is here.”

Masunaga performed maintenance with Lemard, he normally wouldn’t have the opportunity to take part in such as: tire changes, launch procedures on F-15s and F-15 refueling procedures. The opportunity to work closely with his USAF partner left both, Masunaga and Lemard hoping for more bilateral exchange events in the future.

“It’s good to see another side of the mission,” Lemard said. “You can get locked into a narrow viewpoint of how your mission and craft operates, so it’s always fun to be able to see another angle or learn new tricks of the trade that can make us better at what we do. I would love to do this again.”



**横田基地 (Yokota AB)**

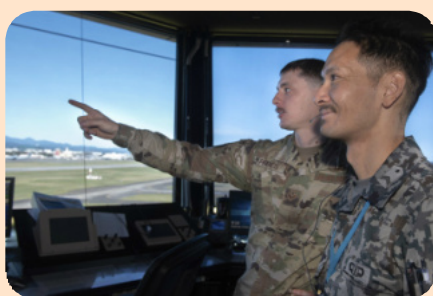
from Yokota AB HP

15 Koku-Jieitai Airmen visited Yokota to work with their U.S. Air Force counterparts, giving them a chance to learn, grow and strengthen relationships. This program allows the Airmen to learn from one another's job while building better practices and also provides Airmen an opportunity to share their culture.

“Through the BEP, I can learn the differences of operations between the U.S. Air Force and Japan Air-Self Defense Force,” said JASDF Tech. Sgt. Yuji Watanabe, Iruma Weather Squadron weather observer. It helps me recognize a lot of pros and cons and gives me a good opportunity of bringing back what I've learned to my unit.”

The Airmen participating in the program come from a variety of sections such as weather, airfield management, maintenance, security forces, supply, and more. The Airmen worked together through a challenging language barrier while strengthening partnerships.

“Every one of our counterparts were kind and encouraged and spoke positively to us,” said Watanabe. “You don't have to worry about your English aptitude. You can enjoy every minute of the program by staying positive. We can definitely learn a lot from each other.”



**【 現役隊員の皆様へ 】**

『JAAGAだより』は、航空自衛隊のOBが作成し、航空自衛隊の全部隊等に配布しています。航空幕僚監部はもとより各級部隊指揮官等、各級司令部の部課長等及び准曹士先任等、並びに、各基地等准曹会、日米相互特技訓練などを担当した部隊等及び記事を寄稿いただいた方々に、配布させていただいております。

また、米空軍、関係政府機関等にも広く配布し、現在の発行部数は約1,700部、発行回数は6月下旬と12月下旬の年2回です。一人でも多くの隊員の皆さんに手に取って見て読んで楽しんでいただけるよう記事も工夫して参りますので、出来るだけ多くの職場に回覧していただくことをお願いします。

(JAAGA 理事会)

**スペシャルオリンピックス支援**  
**JAAGA supports Special Olympics in Misawa and Yokota AB**

**米軍横田基地  
(Yokota AB, USAF)**

今回で 40 周年を迎える 関東地区スペシャル・オリンピックスが、6 月 1 日(土)の爽やかな快晴のもと、米空軍横田基地で開催された。

和やかな雰囲気の中、参加選手の入場行進が開始されると、スタンドを埋め尽くした陸海空自衛隊のボランティアが割れんばかりの拍手で選手たちを迎え、聖火点灯、日米両国国家独唱で開会式が始まり、日米両国の選手宣誓で競技が開始された。競技はグラウンドのトラック競技の他、ボーリングや水泳、バスケットボール等、それぞれの会場で熱戦が繰り広げられた。

各競技を支援しているのが陸自曹友連合会、海上自衛隊海曹会、空自連合准曹会のメンバーを中心とした准曹士隊員及びその家族で、本年は関東近郊の各部隊から約 700 名がボランティアとして参加した。この支援は米軍横田基地下士官団からの要請を受けた航空自衛隊連合准曹会が中心となり、大会の企画・運営面でも全面的に支援し、三自衛隊准曹士が一体となって米軍との良好な関係を構築している。特にトラック競技では、アスリートとバディを組んで競技開始から表彰式までエスコートし、お互いにコミュニケーションをとりながら競技を楽しんでいた。

JAAGA からは、中島副理事長と阪東、村田両渉外担当理事が出席した。各理事は、日米ボランティアの隊員たちを激励しながら、選手・ボランティアと一体となって各種競技を楽しんだ。なお、JAAGA は各地区スペシャルオリンピックスに関し、その主旨に賛同イベントの盛会を祈念するため毎年寄付金を提供しています。

(村田理事記)



The Opening Ceremony of 40th Special Olympics was performed with due solemnity at YOKOTA AB on 1 June



Col Otis C. Jones, Commander of the 374th AW with JAAGA Vice Chairman Nakashima, Director Bando and Murata



(↑) Being absorbed in running a 50m race  
 (↗) The award-giving ceremony,  
 You look very happy after devorted all your energy to the race



Red shirted Jieitai volunteers and their families cheered every athlete with applause



**米軍三沢基地  
(Misawa AB, USAF)**

第33回三沢スペシャルオリンピックスが10月12日(土)、ハンガー949において、青森・岩手から招待されたアスリート及びその家族、第35戦闘航空団副司令官ハモンド大佐(Col Hammond)以下米軍ボランティア、第3航空団副司令加藤史彦1佐以下空自ボランティア、市民ボランティア、特別ゲストとして三沢でパラリンピック事前合宿中のカナダウィルチェアーラグビーチームが参加してにぎやかに行われた。当日は昨年に続き

台風19号(Hagibis)接近の悪天候ではあったが、日米国歌斉唱、大会会長ハモンド大佐挨拶、聖火点灯、カナダウィルチェアーラグビーチーム主将による開会宣言で競技を開始し、参加者一同バスケットボール、サッカー等を楽しんでいた。

JAAGAからは丸山三沢支部長と山本事務局長が参加し、ハモンド大佐にJAAGAからの寄付を手交した。

開会式においてハモンド大佐から長年のJAAGAの活動に対して感謝の言葉があった。

(丸山三沢支部長記)



The 33rd Special Olympics was held at Misawa AB on 12 Oct. Col Hammond, Vice Commander of 35th FW was profoundly grateful to JAAGA

**【スペシャルオリンピックス】**

古代ローマで剣闘士が闘技場に入るときに口にしたという「Let me win. But if I cannot win, let me be brave in the attempt. (私達は、精一杯力を出して勝利を目指します。たとえ勝てなくても、頑張る勇気を与えてください)」という言葉を用いたアスリートの宣誓とともに開始されるスペシャルオリンピックスは、1962年6月にJohn. F. Kennedy 元米国大統領の妹 Eunice Kennedy Shriverさんが自宅の庭を開放して35名の知的発達障害のある人たちを招いてデイキャンプを行ったのが始まりとされ、約500万人の知的発達障害のある人と100万人のボランティアが、170を超える国と地域で参加している活動である。

JAAGAは毎年、米空軍の横田及び三沢基地で開催されている活動に、ささやかではあるが支援を行っている。



作:宇山佳男OB

## 令和元年度 JAAGA横田基地研修 JAAGA Members' Visit to Yokota AB on 4 October

朝からの本降りの雨が上がり、晴れ間がのぞく絶好の研修日和となった10月4日(金)、令和元年度のJAAGA横田基地研修(団長:小城真一正会員、副団長:村越政雄個人賛助会員、小島俊文法人賛助会員)が、33名の研修団員(正会員4名、個人賛助会員8名、団体賛助会員2名、法人賛助会員19名)及び4名の同行理事(企画:小野、会員:伊藤、財務:大岩、広報:木村)の計37名で実施された。

(※参加者の所感文を次ページ以降に掲載。)

### 【結団式】:0920～

午前9時前から逐次、集合場所であるJR昭島駅南口に参加者が集まりはじめ、定刻の0920から現地において結団式が行われた。担当理事の軽妙な進行で初対面の緊張がほぐれた中、主催者代表として小野理事が挨拶を兼ねて注意事項を述べ、続いて研修者紹介に移った。まず、団長、両副団長から簡潔な自己紹介を含めた挨拶が行われ、続いて他の研修者が順次紹介され一言述べ、都度拍手でお互いを歓迎し合い、10分程度で結団式が終了した。



Inaugural meeting of JAAGA Tour members in a friendly manner at Akishima Station



Getting on a USAF bus for Yokota AB

集合時から立ち会っていた横田基地第374空輸航空団の2名の将校(広報スリフト中尉(1st Lt Stuart Thrift)、行事企画テイラー大尉(Capt Evan Taylor))のエスコートにより、米空軍の大型バスで約15分の道のりを、一路横田基地へ向かった。パスポート等の身分証明書を手に身の引き締まる入門であったが、JAAGAに対する信頼感の現れか、極めてスムーズに入門手続きが行われ、予定通り、研修がスタートした。

### 【CV-22 オsprey見学】:1000～

バスはFOD(Foreign Object Damage)点検を終え、飛行場地区に入り、CV-22の駐機場所に到着。第21特殊作戦中隊の隊長であるホック中佐(Lt Col Jason



CV-22 Osprey  
Lt Col Hock, Commander of 21st Special Operations Squadron, welcomed JAAGA members and explained

Hock)自らが、「オハヨウゴザイマス」と我々を迎えてくれ、「CV-22はヘリでありエアプレーンだ」と述べた後、機体の外部、内部を案内し、救難装備、ガンマウント、レーダージャマー、エンジン、貨物室等、具体的に説明してくれた。最後は全員にコックピット内まで見せてくれ、横田基地到着早々の手厚い内容に、参加者から感嘆の声が漏れた。



### 【C-130J スーパーハーキュリーズ見学】:1025～

徒歩でC-130J駐機場所に移動。第36空輸中隊のランバー少佐(Maj Jonathan Rember)とフランク3等軍曹(SSgt Walter Frank III)の案内で、まず全般説明を受けた後、貨物室に入り、機内説明の他、任務に応じて設備入れ替えが可能であること、長年行っている「クリスマスドロップ作戦」の概要、空挺降下・物量



C-130J Super Hercules  
Maj Rember and SSgt Frank of 36th Airlift Squadron gave JAAGA members good understanding about the aircraft and mission

投下の要領等について説明を受けた。最後は、コックピット内に案内され、外で待機中の JAAGA 研修者がタキシング中の他の C-130J に向かって手を振る姿も見られた。

【シュナイダー司令官表敬】: 1100 ～

大型バスで飛行場地区を後にし、第 5 空軍司令部庁舎に到着後、JAAGA 研修団を代表して団長、両副団長等が第 5 空軍司令官シュナイダー中将 (Lt Gen Kevin B. Schneider, Commander, 5th Air Force) (副司令官ドージャー准将 (Brig Gen Todd A. Dozier, Vice Commander, 5th Air Force) が同席) を表敬し、懇談した。



Courtesy visit to Lt Gen Schneider, Commander, 5th Air Force (from left) Brig Gen Dozier, Vice Commander, 5th Air Force, and JAAGA representatives (Mr. Kojima, Mr. Murakoshi, Mr. Kojo, Mr. Ono)

冒頭、小城団長から、航空自衛隊及び JAAGA への理解に対し謝意を述べるとともに、齊藤 JAAGA 会長からのレターを手交した。シュナイダー司令官からは、JAAGA 研修団の来訪と JAAGA が日頃から日米同盟のため米空軍のために様々な活動をしていることに対し、謝意が表明された。その後、午前中の航空機見学に話が及び、団長、副団長との間で意見交換が行われた。

司令官はオスプレイについて、「オスプレイは多用途で高性能な航空機。特に特殊作戦任務に威力を発揮する。紛争時にはその能力が必ず必要になる。米海兵隊総司令官バーガー大将 (General David H. Berger, Commandant, U.S. Marine Corps) は自衛隊のオスプレイによく言及している。米本土のニューリバー海兵隊航空基地で自衛隊がオスプレイを使って訓練 (注: 陸自 V-22 オスプレイを使用した教育) し海兵隊と一緒に技量・能力を向上させている。早期に日本にオスプレイが配備されて、日米で一緒に様々な任務、訓練ができることを期待する」と述べるとともに、安全性に対する懸念が一部にあることについては、「友好祭等ではできるだけ新しい航空機を展示して、日本の一般の皆様を理解を得る努力をしている。先日の横田基地友好祭では、CV-22 と臨時展開中のグローバルホークを展示した。そういう機会を使って実際にそばに寄って見て理解を深めてもらえればと思う、能力や安全性についても情報提供の機会を設けるよう努力していく」と述べられた。また、地元と米軍との良好な関係について話が及んだ時には、「横田基地のみならず全国の米軍基地で地元と良い関係を築かせてもらっていることを、大変嬉しく思っている。沖縄についても、別の意味での政治的課題があるためそう簡単ではないが、良い関係を築かせてもらっている。私たちとしても常日頃から良き住民、隣人であるよう努力している。日本政府、地方自治体、周辺住民の方々には、本当に感謝をしている。通常の民間空港と異なる軍の施設があるため違った意味での不便をかけていることは重々承知しており、その中であつても訓練の機会をしっかりと与えてくれていることに感謝している」と強調された。

終始、穏やかな雰囲気での懇談が続く中で司令官は、「航空自衛隊の OB」という言葉に対して「アメリカでは皆びっくりする。Not “Old Boy”, but “Experienced Boy”、経験のある、知見のある、ですね。」と笑いを誘うとともに、

### (個人賛助会員) 浅見 純也 氏

横田基地の有る福生で生まれ今も暮らしている自分にとって、Yokota は生活の一部です。

子供の頃は自宅周辺にも米軍ハウスが建ち並び、小学生の頃の授業中には防音二重窓越しに F-4 フェントムが爆音を轟かせていました。放課後はランドセルを放り出し、近所のアメリカの子供たちと隠れん坊やローラースケートをして遊んでいました。

社会人になり勤めたのは、横田基地第 2 ゲート前に有った米軍相手の免税店でした。ここでは沢山の米空軍関係の方や米大使館員、星条旗新聞社の方々との交流があり、今でも公私ともにお付き合いさせて頂いています。

その後、事業転換で会社は老人介護施設となり、今は自分も介護の現場で日々奮闘しています。場所柄、勤務先施設と米空軍との交流も多く、施設の夏の納涼祭には横田基地司令が挨拶に来て下さり、同行の米軍妻女の皆さんの“七夕ダンサーズ”の盆踊りは大盛り上がりです。また、9 月の横田基地日米友好祭では米空軍より施設利用者の皆さんが招待され、ハンディキャップバスが交付され施設の福祉車両で間近まで入れて頂け、楽しませて頂いています。優しい笑顔の若い米兵達と大戦経験者である施設利用者の皆さんとの交流は和みます。12 月のクリスマス前にはゴスペル聖歌隊の皆さんの訪問もあり、美しく迫力の有る歌声に皆さん大感動しています。

そんな中、先般の横田基地研修に参加させて頂き、普段見慣れている C-130J スーパーハーキュリーズや CV-22 オスプレイを間近に見ることが出来、また普段は立入ることが出来ない第 5 空軍司令部及び航空総隊司令部を見学させて頂けた事、また米軍及び空自の現場の方々から貴重な話も沢山伺った事は、自分にとって大変有意義なひと時でした。

初めての研修参加で少し緊張気味でしたが、JAAGA 理事の皆様には大変お世話になり御礼申し上げます。

「ある基地の航空祭で現地米空軍司令官のスピーチに対する地元の人たちの反応を見て、彼が地元にごく愛されていることが感じ取れた」との JAAGA 側の発言に対しては、「Did he pay you?」とジョークを飛ばしながらも、「彼は米空軍とコウクウジェイタイ、基地と地元自治体・住民との関係を十分理解し良き隣人であり続けるように努力しており、日本語を使うようにも努めている。よくやっているなど純粋に思う」と、しっかり部下指揮官を掌握しフォローする一面も見られた。

**【第5空軍概況説明】: 1125～**

会議室に場所を移し、概況説明が行われた。

司令官からの歓迎の挨拶、約2分間の紹介ビデオに

続き、「第5空軍の任務と日本の防衛に対する支援」、「アジア太平洋地域における平和と安定を維持するための役割」について、スライドを用いた10

分程度のブリーフィングが行われた。

その後、質疑応答セッションに移り、「太平洋軍」から「インド太平洋軍」への名称変更、宇宙軍に係る検討状況、韓国の GSOMIA 破棄の影響や今後の展望等について、活発な意見交換が行われた。GSOMIA の件については、中国、北朝鮮、ロシアに有利な状況になっていることは残念であるが、日韓が関係をある程度修復して行くことが予想され、その中においても軍と軍の関係は強いものがあると思っていること、つい最近就任した米統合参謀本部議長マーク・ミリー陸軍大将 (Army Gen Mark A. Milley, Chairman of the Joint Chiefs of Staff) の発案で、統合幕僚長山崎幸二陸将、韓国合同参謀本部議長パク・ハンギ (朴漢基) 陸軍大将による3者会談が行われたこと等、勇気づけられる動きもある旨が、司令官自らの言葉で述べられた。殆どの参加者にとってはこのような意見交換の場や司令官に直接接することは初めてであり、米空軍の取組みを肌で感じられる40分間となったようである。

なお、会議室の壁面には米軍と陸海空自衛隊との共同活動場面の写真や隷下部隊のエンブレム等が所狭しと掲示されており、中でも宮城県気仙沼市の

中学生から贈られた「Remember 絆」の旗を掲げてあることが、当時の航空自衛隊の「千里同風」の精神と重なるようにも感じられ、印象的であった。



5th AF briefing and discussion. Lt Gen Schneider responded to all questions mostly by himself. Very impressive and fruitful time for JAAGA members



“Remember Kizuna” flag, presented by Junior High School students in Kesenuma, Miyagi, was observing the meeting



**(法人賛助会員) 伊藤忠商事株式会社 亀島 聡子 氏**

当該研修はすでに何度も回を重ねているところではございますが、私自身は今回が初めての参加となりました。応募者も多数いらしたと伺っており、その中で今回このような機会を頂きました事、まずは関係者の皆様に感謝申し上げたいと思います。

仕事柄、横田基地自体は過去にも訪問した経験はございますが、米軍機、その中でも一般のアクセシビリティがあまりない機種をここまで間近で見学できる機会もそう多くはない為、率直な印象・感想としては、非常に貴重な研修機会となりました。第5空軍の中で最も大きい航空団である嘉手納に加え、三沢においても毎年同様の研修が企画されているという事で、こちらの方も是非、次回以降の参加募集時に手を挙げてみたいと思います。

今回の研修でもう一つ実感した事は、防衛という分野における日米の協力関係は、政策レベルに留まらず、運用・実務レベルまで緊密に落とし込まれているという事です。日米共通の新規装備品導入時の訓練体制や、新しい組織の立ち上げ支援等、空軍のブリーフィングの中でも一例として紹介がありましたが、業界に身を置く者にとっては当然の事として勿論認識はあるものの、本研修中の説明や会話を通じて、日本の安全はこのような日米の協力の元に成り立っている事を改めて肌で感じ、また勉強になりました。

微力ながら日本の防衛の一端を担う一人として、本研修における交流や経験をまた今後の業務にも還元して参りたいと思います。



(↑) Prior to luncheon, JAAGA members took a commemorative photo with USAF and Koku-Jieitai commanders and staff members  
 (↓) Opening remarks by Mr. Kojo, Lt Gen Schneider and closing remarks by Lt Gen Izutsu



#### 【集合写真撮影、JAAGA 主催昼食会】: 1215 ~

バスでオフィサーズクラブに移動し、昼食会に参加する米空軍、航空自衛隊、JAAGAの全員で記念の集合写真を撮影した。そして昼食会会場に入っていくと、この日のために初めて結成された日米合同バンドが軽快な演奏で一同を迎えてくれた。会場のあちこちで談笑が見られるようになった中、小野理事の進行により、昼食会が始まった。

まず、主催者 JAAGA を代表して小城団長が、第 5 空

軍、航空自衛隊への謝意、JAAGA の意義、横田研修の位置づけとともに、自身の現役時代の米空軍との関わりの思い出 (F-16 三沢配備、南スーダンへの派遣任務、「イラクの自由作戦」、「トモダチ作戦」、総隊司令部の横田移転) を紹介し、「日米現役の皆さんの揺るぎない信頼関係と絆が、日米空軍種間の得がたい財産であり、同盟の礎であると確信している、課題は山積みだと思うが、培ってきた固い絆、信頼関係をさらに強固なものとし、我が国の安全保障、インド太平洋地域及び国際社会の

#### (個人賛助会員) 高畑 ありさ 氏

初めての参加です。

平和を守るために日々戦う自衛隊、国の防衛への使命感を持つ防衛産業、そのような立派な方たちと接し、国民として国を守ることに真剣に向き合わなければいけないという気持ちが沸き上がってきました。

研修先の現場の声から学んだことは、訓練に対する考え方です。

八王子市上空も軍用機の夜間飛行や低空飛行が行われています。現実の形で訓練すること、部隊を動かすことが抑止力となり、抑止力は即応体制にかかっていることを理解しました。

戦争をするためではなく、戦争を未然に防ぐための訓練であること、その理解が必要です。

印象に残ったことは、第 5 空軍には空軍兵やその家族を支援する役割があることに言及している点です。その組織が大切にしてほしいものには、国民も敬意を払うことができます。日本も自衛官やその家族に対して、その地位と存在を認め、もっと尊ぶ国になってほしいと思います。

今回の研修を通して、自衛隊に感謝を表すだけでなく、国民にも国防の義務がありそれを果たしていくことを、八王子市防衛協会の会員として、広めていく決意を新たにしました。

貴重な機会を頂き、ありがとうございます。

平和と安定に一層貢献されることを祈念する。JAAGA、つばさ会も引き続き空自、米空軍を支えることを誓うと挨拶した。

続いてシュナイダー第5空軍司令官から、「ミナサンコンニチワ、ホンジツノゴホウモンニカンシヤイタシマス」に続き英語で、「日本防衛の支援、インド太平洋地域の安全のために、太平洋空軍は最も高度な能力を日本に前方展開している。各航空団の高度な能力は、安全保障環境の急速な変化への日米の対応を可能にする。中国、北朝鮮、ロシアは我々が数十年間享受してきた平和と安定を脅かす潜在能力を持ち既にその能力を行使しており、日米同盟が今ほど重要なときは無い。日米同盟をより良く強くするためのJAAGAの活動は大変高く評価されており、私も皆さんに感謝している。直面する課題に対応するための最高レベルの即応態勢を維持するには、現実的な訓練が必要になる。抑止力はこの即応態勢にかかっている。皆さんのご支援を期待するとともに、JAAGAの日米同盟への貢献に深く感謝する。今回の研修の機



Japan-US Joint Band, specially organised for this luncheon, created warm atmosphere

会は、我々の任務や軍の重要性に対する皆さんの理解を深める機会となり、とても重要である」と述べ、JAAGAと日米合同バンドに対する感謝とともに

に、「ゴセイチョウアリガトウゴザイマシタ」と締めくくられた。

いよいよビーフステーキをメインディッシュとする食事が始まり、JAAGA会員と米空軍・空自の隊員が必ず隣り合わせになるよう配意したテーブル配置も功を奏し、81名の参加者(JAAGA:37名、米空軍:26名、空自:18名)の間で様々な話題で相互理解と懇親が深められたようである。気がつくと、日米合同バンドのテーブルには誰も座っておらず、食事を早々に切り上げて、再び演奏で会場内に温かい雰囲気を出していた。

名残惜しくはあったがお開きの時間となり、最後を締めくくって、航空総隊司令官井筒俊司空将(Lt Gen Shunji Izutsu, Commander, Air Defense Command)から挨拶が行われた。「JAAGAの皆さんようこそ日米横田基地へ。シュナイダー司令官グレートケアありがとう。空自隊員や米軍人をガソリンに例えるならば、JAAGAの皆さんはオイルのような存在。JAAGAの皆さんのオイルのような役割が無ければ、私たちは動くことが出来ないし、エンジンは大いなるダメージを受ける。JAAGAの皆さんの米空軍、空自に対する協力と貢献に感謝する。米空軍、空自、JAAGAの関係が日米同盟を強固にするものである」

1350過ぎに昼食会が終了した後も、演奏と歓談はしばらく続いていた。

【RQ-4グローバルホーク見学】:1415～

バスで格納庫に向かいRQ-4を見たとき、「でかつ！」という驚きの声が上がった(1機でも十分大きい、ブロック30と40の2機が重なって見えていた)。第319偵察群第1分遣隊長ベン・クレイクラフト中佐(Lt Col Benjamin Craycraft)が「昼食会から戻って来てパネル

### (団体賛助会員) 三沢市防衛協会 小比類巻 優子 氏

神無月を迎え、高くなった空を仰ぎ、まだまだ汗ばむほどの陽気に恵まれた4日、JAAGA主催の横田基地研修に参加して参りました。

集合場所の昭島駅南口では、この度の研修に際し、細かな連絡をいただいた担当理事のユーモアあふれる自己紹介があり、緊張していた顔を少し緩めることができました。

迎えに来ていただいた米軍のバスに乗り込み、整然とした基地独特のゲートをぐりぬけましたら、そこには見慣れた景色である三沢基地とよく似た建物が立ち並ぶ風景が広がりました。建物の色、形は米軍三沢基地と同じに見えました。エプロンに並ぶ、輸送機…何かが三沢と違う…。そう、戦闘機が1機も無いのです。なるほど、景色の違いはそこだったのです。エプロンにそびえ立つオスプレイ、格納庫で鎮座?していたグローバルホーク、圧巻でありました。その後、第5空軍司令部会議室にて、米軍司令官とJAAGA主要メンバーの皆さんとの会議を目を白黒させ聞き入り(崇高であろう会話でしたが、記憶に残っておりません…汗)、その後オフィサーズクラブにて、ステーキランチを堪能しました。私の席には、米空軍大佐のデイビッドさんと、米空軍中佐のブライアンさんがいらっしや、通訳さんを介して、和やかに食事ができました。

私が、米軍の方に伝えたかった事。「2011.3.11の東日本大震災の折に、米軍の「TOMODACHI OPERATION」の発動で、どれだけの被災者が救われたことか。私の友達の家族も犠牲となったあの災害時の皆さんの敏速な働きに、直接感謝申しあげたかった」と、通訳さんから伝えてもらいました。デイビッドさんより、「必要とされている現場に、いち早く駆け付けたい思いがあるけれど、許可が下りるまでの時間がかかりすぎ、もどかしい思いもあったのですよ」とご返答いただき、胸が熱くなった次第です。

食後には、空自総隊司令部にて、井筒司令官の「リーダーシップに必要なこと」と題する講義があり、司令官に限らず、そこで勤務されている方々の苦悩も垣間見えた気がします。余談ですが、米軍司令部会議室も、航空総隊司令部の会議室も、映画「サンダーバード」に出てくるような立派なお部屋であったことも報告しておきます。

また、以前三沢基地にて勤務され、今総隊司令部で活躍されていらっしやる皆さんとの再会ができ、快く歓迎いただき、大変懐かしく、嬉しく思いました。皆さまの益々のご活躍を心より祈願申し上げます。

そして、実り多い研修を企画運営されているJAAGAの益々のご繁栄を祈念申し上げるとともに、この度の研修に参加させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。大変、有難うございました。



RQ-4 Global Hawk  
Lt Col Craycraft, 319th Operations Group  
Det. 1 commander, explained details in a humorous manner



を準備したので汗をかいてしまった」と研修団を迎え入れ、パネルを用いてシステムの能力等を、その後機体を回りながらセン

サー等装備の詳細を説明された。武器や輸送能力を持たない純粋な無人の偵察機であること、エンジンは信頼性が高く仮に故障しても150マイル程度滑空可能であることや、民航機が飛ばない高高度で長時間運用される等の特性について、研修者は理解を深めた。十分な高度に達した後はカリフォルニア州ビール空軍基地とノースダコタ州のグランドフォークス空軍基地から操縦されるとの説明の際には、「ノースダコタ、誰も知らないだろう (never heard of it)、ノルウェーの真ん中あたりだ (middle of Norway)。北海道のように寒い。」と奇抜なジョークで大笑いさせたのは、印象づけるテクニックだったのであろうか。トモダチ作戦で100時間以上福島上空を飛行し、赤外線カメラで原子炉の温度測定を行ったことも紹介された。参加者の「主翼のみ白いのはなぜ？」と

の質問に対しては、「That is a long answer」と牽制しつつ、「航空機のコンポーネントは燃料で冷却している。大部分の燃料は主翼内にある。太陽熱による燃料の温度上昇を防ぐため。Short answer」と端的に回答され、再び笑いが起こる中、見学を終了した。

(注:米太平洋空軍は2011年以来、2014、2015、2018年に三沢基地、2017、2019年に横田基地にグローバルホークを一時展開させており、第1分遣隊は10月20日にアンダーセン空軍基地(グアム)に帰還した。)

#### 【航空総隊司令部研修】: 1505 ~

バスで航空総隊司令部庁舎に移動し、集合写真撮影後、建物内の会議室で航空総隊副司令官上ノ谷寛空将 (Lt Gen Hiroshi Kaminotani, Vice Commander, Air Defense Command) の歓迎を受け、いよいよ航空総隊の概況説明が始まった。

説明は、ハワイ連絡官を経験した防衛課長竹岡功二1等空佐が担当し、航空総隊の任務・組織等、対領空侵犯措置の状況、弾道ミサイルへの対処、災害派遣の状



Commemorative photo with Air Defense Command Generals: (from left) Lt Gen Kaminotani, Vice Commander, Lt Gen Izutsu, Commander, Maj Gen Kakihara, Chief of Staff

#### (法人賛助会員) 三菱商事株式会社 木内 俊介 氏

今回私は初めてJAAGAの研修に参加させて頂きました。業務上、基地を訪問する事は何度かありましたが、今回の研修は私にとって格別の体験となりました。

横田基地内に入り最初に我々が目にしたのは、米軍が保有するCV-22オスプレイでした。小型の航空機を想像していましたが、小さな車両を搭載できる程の大きさがあり、非常に安定した形状をしている、という第一印象を抱きました。また、本機が人道支援/災害救援の役割を担っており、小回りの利くヘリコプターより迅速に、且つスピードの速い航空機では到達できないポイントでの救援活動を行えるとの説明を聞き、昨今災害が多発している日本において、なくてはならない存在であると確信しました。その後輸送機C-130Jスーパーハーキュリーズや無人偵察機RQ-4グローバルホークなど日本の自衛隊基地では中々見る事のできない貴重な装備を見る事ができ、とても有意義な時間となりました。

シュナイダー中將率いる第5空軍との面談では、在日米軍が中国/北朝鮮などだけではなく、自然災害に対してもアンテナを張り、日本そしてアジア太平洋地域の安全保障に大きく貢献している事を再認識する事ができました。面談後、私はシュナイダー中將と一対一で話す機会に恵まれ、日本のミサイル防衛に関して意見交換を行う事ができました。階級が驚くほど高く、私のような一般人が到底会話を行えるような相手ではないと思っておりましたが、非常にフレンドリーに、且つ丁寧に質問にご回答頂いた事に感銘を受けました。

最後に航空総隊司令部の方々との面談ですが、航空総隊副司令官上ノ谷空将に質問をさせて頂く機会があり、日本のIAMD(統合防空ミサイル防衛)に関してご意見を伺う事ができました。現状日本の防衛計画は、宇宙/サイバー/電子領域、所謂“宇サ電”に注目が集まる一方で、IAMDに関しても確りと盤石な体制を整え、航空自衛隊が保有している航空機などのアセットをいかに効率的且つ統合的に運用するかを検討している、というお答えを頂きました。私自身も現在航空自衛隊が保有するアセットにどのようなものや機能を加え、それらをどのように運用すれば日本の自衛隊が最も力を発揮できるのかを検討し、少しでも日本の安全保障そして平和に貢献する事ができれば、と考えました。

況、今後の取組み、日米連携強化の現状について、スライドに基づき補足説明を加えながら行われた。中でも、対領空侵犯措置が平成28年度には史上最高の1,168回に達し、中国の軍事力強化、力を背景とした現状変更の試みが継続し、ロシアのパトロール飛行、プレゼンス誇示に伴い対ロシア緊急発進が増加傾向にあること、「令和元年8月前線に伴う大雨」、「令和元年台風15号」に係る災害派遣を佐賀県、千葉県で継続中であり、加圧式の給水車や、被害調査に空自で初めてドローンが使用されたこと、F-35Aの部隊建設、米空軍との連携状況等について、認識を深めることができた。

約20分間のブリーフィングに続く質疑応答では、PAC-3部隊機動展開訓練を東京湾の海浜地区で行ったことの意義、偵察航空隊廃止・グローバルホーク導入等に伴う偵察機能の再整理の動向、STOVL(短距離離陸・垂直着陸)機の運用構想、クロスドメインにおいて必要と考えられるアセットに係る正会員、法人賛助会員からの質問に対し、主として上ノ谷副司令官自らが、保全上可能な範囲で応じてくれた。中でも、「PAC-3部隊の姿を国民に見てもらふことは、安心・安全及び抑止力として重要であるので、積極的にやっていきたい。STOVL機に関連して「空母化」と言われることがあるが、それは適切ではない。南西地域の特性に鑑み、天候悪化時にも戦闘機が着陸できるよう洋上の離着陸場を確保するという観

点であることを理解してほしい」と強調され、約10分間の質疑応答を終了した。

#### 【航空総隊司令官講話】: 1600～

総隊概況説明後、地下会議室を見学するチャンスが得られた。休憩を兼ねた見学後、元の場所に戻り、井筒航空総隊司令官の講話を受けた。

井筒司令官からは、①新防衛大綱における総隊の取組み、②リーダーシップ、③ワークライフバランス等の話がなされた。②と③は、今回の研修に企業からの参加者が多いとして、前前職の空幕人事教育部長の経験も踏まえて披露されたものである。



Lt Gen Izutsu enthusiastically lectured mostly on leadership and work-life-balance, which is fresh and stimulating especially for JAAGA Associate Members



#### (法人賛助会員) 日本電気株式会社 谷野 翔一 氏

JAAGA主催による横田基地研修当日、集合場所の昭島駅までは生憎の悪天でしたが、日が上がるにつれて見る見る回復し、絶好の研修日和となりました。

CV-22 オスプレイ、C-130J スーパーハーキュリーズ、RQ-4 グローバルホークを見学し、いずれの機体も、何よりその大きさに圧倒されました。CV-22、C-130Jについてはコックピットも含めた余すところのない内部見学ができる貴重な機会をいただきました。RQ-4は、アンダーセン空軍基地(グアム)所属ですが、例年夏の悪天候から回避するために、4ヶ月間(今年は諸事情で2ヶ月間)日本に滞在しているところを見学させてもらえたようでした。今回、ブロック30型・40型の2機が並んでおり、高高度・長時間滞空能力、保有しているセンサー、運用イメージ(トモダチ作戦での運用事例など)に至る非常に具体的な説明をいただき、無人機で対応する領域が現実であり、将来さらに拡大していく様相を実際に垣間見ることができました。

第5空軍会議室において、シュナイダー司令官以下、高官の方々との接見およびブリーフィングをいただきました。冒頭、司令官より歓迎のお言葉を頂戴し、第5空軍の任務の多様性、また地理的スケールの大きさに大変驚くとともに、航空自衛隊との緊密な連携関係について、より理解を深めることができました。宇宙軍に関する司令官のお考えを伺える場面もあり、部隊の位置付け、統合任務の重要性に関する率直な見立てなど大変貴重なお話を伺えました。防衛大綱に基づき、宇宙作戦に向けた検討を進める航空自衛隊にとって、どのような能力、運用、組織等が必要となるか、今まさに米軍で取り組んでいることが大変参考になるだろうとの考えを持ちました。

昼食は、将校クラブへ移動し、井筒司令官以下、総隊司令部の方々都合流され、日米合同の昼食会となりました。日米合同バンドによる素晴らしい演出のおかげで、英語に自信のない私でも、八村塁選手についてなど、趣味のバスケットボールの話題で米軍の方々とも友好親善させていただける貴重な時間となりました。また、日米間の終始にこやかに会話されている様子から、平素から密でフランクな交流を持たれていることが想像でき、非常に心強く感じることができました。

航空総隊司令部では、任務、部隊紹介、主要装備等についてブリーフィングをいただきました。また、施設研修においては、日米の間で有機的な連携が図られていることを実感しました。その後、井筒司令官による講話を拝聴しました。防衛大綱における新領域・多次元統合を踏まえ、「総隊一丸」に因んでリーダーシップに関する司令官のお考えを聞く大変貴重な機会となりました。特に印象に残ったことは、指揮官が部下とコミュニケーションを通じて調節したうえで決断・命令をくださることが責任感あるリーダーシップであり、それを成すのは指揮官の品格・人格である、ということです。これこそがまさに統御につながる考え方なのだろうと深く感銘を受けました。

本研修を通じて、新たな防衛大綱が示すとおり、安全保障環境の変化・複雑化にともなって、日米連携の一層の強化が必要なことを強く肌で感じました。今回、様々な場面で友好親善を図ることができ、研修の目的を達成することができました。民間の立場から国家安全保障に貢献できることの誇りと責任を改めて認識し、より一層士気を高める大変貴重な経験となりました。お力添えをいただきました関係者の皆様にはこうした機会を設けていただき心より感謝申し上げます。



①については、新規領域(宇宙、サイバー、電磁波)や領域横断等に取り組むためには断捨離や縦割りの排除も必要であること、年代や経験等によって受け取り方は異なることも理解しつつ「総隊一丸」を勤務方針に掲げていること、航空総隊は勿論であるが官民の意識も変えていかななくてはならないことが強調された。

②については、「自衛隊において指揮官が行う指揮には、狭義の指揮(=命令)、管理(=昇任、異動、賞罰等)、統御(=リーダーシップ:指揮官の人となり、品格、人格)の意味が含まれるが、実は民間でも全く同じ(業務命令、労務管理、リーダーシップ)。リーダーシップは最終的には人格、品格であり、持って生まれたものもあるが、むしろ年齢、経験でできていくと思う。テクニックとしてのリーダーシップもある。それはコミュニケーション。以前、米空軍で准将・少将クラス指揮官を育てる課程を履修した時、ある統連合航空部隊経験者(中将)が、その職に求められるのは、CommunicationとCoordinationと言ったことに、少なからずショックを受けた。自分はdecisionとorder(決心して命令する)だと思っていた。しかしよくよく考えてみると、それは各軍種がやること。陸海空軍の作戦機、しかも他国の飛行場を使わなければならないとなると、統連合部隊指揮官のすることは、調整とコミュニケーション。私は勿論決心して命令するが、枠組みが決まっていないこと、どんどん状況が変わることは、私自身がちゃんと調整をさせあるいは調整をして、コミュニケーションで伝えることが大切だと思う」と話された。

③については、「勤務環境、教育環境、特に育休、産休は目に見える形で改善されてきている。但し、行きすぎとは言わないが矛盾が露呈していると感じている。そもそもworkとlifeを分けることができるのか。workとlifeを天秤にかけてバランスをとるのがワークライフバランスの発想だが、仕事の中で生きがいや達成感があり、分けて考えられるものではない。24時間の生活であるlifeの中にworkがある。workとleisureなら分かるが、workとlifeのバランスか?そういう矛盾の露呈を自衛隊の中よりもむしろ外の企業の取り組みを見て感じる。個人的にはそもそもワークライフバランスという言葉がおかしいと思う。単純にworkとlifeに分けるのではなく、workとrest(休むこと。leisureも含まれる)の2つ、もしくはrefresh(趣味、気分転換、癒やし等)の3つくらいで考えないと、コンセプトとしてワークライフバランスは行き詰まりかねないと思う」

そして最後に、「なぜこういう話になったかという、前前職の話になるが、色んな新しいもの、装備品の性能、周辺国については一生懸命考えるが、考える我々自身がすり切れて首が回らない状態になってはだめだ。一生懸命仕事をする、そのためにセルフコントロールをする、特に幹部はそのような環境を作っていく、ということで、2

つめのリーダーシップと3つめのワークライフバランスという、少し毛色の違う話をさせてもらった」と締めくくられた。

続く質疑応答の場面では、GSOMIAをはじめとする心配事、総隊作戦指揮所の機能強化に関する質問、改善は抜本的に行うべきだが本来果たさなければならない機能を削ぐようなことがあってはならないといった意見が出された。これらに対し井筒司令官は、日米の補完・連携を重視する旨とともに、触ってはならないところは触らず、自分の範疇で変えるべきところはしっかり変えていく旨応じ、最後にJAAGA研修団の来訪に改めて謝意を表明された。

#### 【解団式】: 1625 ~

引き続き、現地で解団式が行われ、団長、両副団長から有意義な研修が無事終了したとの感想が述べられた。最後に小野理事からお世話になった総隊の担当者が紹介され、感謝の拍手をもって、研修の全日程を終了した。

#### 【昭島駅到着、解散】: 1650

米軍バスで昭島駅に向かう車中では、終日エスコートしてくれた米空軍将校2名が一人一人に飲み水を手渡ししてくれ、研修者間で一日の出来事を振り返る声も聞かれた。駅到着後各研修者は、疲れた様子も見せず、それぞれの家路についた。

今回の研修に当たって米空軍はとてもオープンで寛容であり、JAAGAに対する信頼感が強く感じられた。研修者とその信頼感に応える責任を意識出来たことも、成果の1つであったと言えよう。また、5空軍司令官をはじめ米軍人は皆、「コウクウジェイタイ」と呼称しており、航空自衛隊を信頼し尊重している姿が読み取れた。

今回の研修の調整・実施に当たってお世話になった航空自衛隊、第5空軍(第374空輸航空団を含む)の皆様へ感謝申し上げます。

(木村理事記)



The UN flag, the American flag and the Japanese flag were fluttering for peace in the pure blue sky

## SPORTEX' 19A

### SPORTEX' 19A, JAPAN - US friendship golf athletic meet



Under fine weather, 59 players, including 17 USAF members, and 42 JAAGA members, enjoyed playing field meeting at Tama Hills Golf Course on Nov. 14

11月14日(木)、恒例のJAAGAゴルフコンペ「SPORTEX' 19A」が多摩ヒルズゴルフコースにおいて開催された。当日は、北日本では雪のところもあり、全国的に雨が降る予報であったが、JAAGAの晴れ男・晴れ女会員パワーで絶好のゴルフ日和となった。メンバー、スタッフ、天候、ゴルフコース、クラブハウスでの温かい食事、etc. 素晴らしい環境に恵まれ、円滑な運営のもとにプレーを楽しみ、大いに親睦を深めることが出来た。

今回は、米空軍横田基地から第5空軍司令部A6部長ワーダック大佐(Col Randy Wardak)をはじめとして17名及びJAAGAから齊藤会長をはじめ会員42名の総勢59名のプレーヤーと2名のボランティア・スタッフが参加した。

SPORTEXの朝は早く、参加者は、朝5時にゲートがオープンすると続々とメンバーが集まり、受付を済ませ、クラブハウスに準備された朝食をとり、ドライビングレンジで練習をするなど準備を整えた。

開会式は、6時半から行われ、主催者JAAGAの齊藤会長、米空軍ワーダック大佐からご挨拶をいただいた。続いて企画の上田理事から競技要領について、18ホール・スループレー、新ペリア方式の個人戦で行くことなどの説明があり、参加者全員でにこやかに記念写真を撮影した。

競技は、ショットガン・スタート方式(競技各組は指定されたスタートホールから合図とともに一斉に競技を開始する方式)により定刻に開始され、終始和やかな親善ムードの中、真剣にゲームにとりくみ大いに楽しんだ。

18ホールを終えてクラブハウスに戻るとスコアがボランティアに提出され、パーティごとそれぞれテーブルを囲んで昼食をとり、ゴルフ談義で盛り上がった。

ボランティアによるスコアの集計が終わると閉会式に進み、成績発表と表彰式が行われた。

成績は、ジャレットさん(Mr. Scotty Jarret)が優勝(GRS 87 HDCP 18 NET 69)、上田会員が準優勝(GRS 80 HDCP 9 NET 71)をそれぞれ収め、齊藤会長から賞品が贈られた。そのほか技能賞(ニアピン、ドラコン)並びに3位及びラッキー賞(5の倍数順位の飛び賞)にもそれぞれ賞品が贈られた。また、栄えある日米双方のベストグロスには、JAAGA上田会員(GRS 80)に5空軍司令官賞が贈られ、米空軍側シーリーさん(Mr. Wayne Seeley)(GRS 85)にJAAGA会長賞が贈られた。

最後に、米空軍を代表してワーダック大佐、JAAGAを代表して齊藤会長からそれぞれスピーチをいただき、本SPORTEX' 19Aが円滑に行われ、日米双方の親睦親善を深める機会になったことへの謝意と、開催に尽力された米軍関係者、多摩ヒルズのスタッフとJAAGA役員への慰労の言葉が述べられた。今後も友好と絆が一層深まることを祈念し、次回開催を期して終了した。

なお、これまでのSPORTEX開催に引き続き、今回も米空軍から中村さん、JAAGAから阪東理事が運営ボランティアとして参加され、会の円滑な運営に貢献して頂きました。紙面を借りて御礼申し上げます。

(福永理事記)



Opening remarks by Mr. Saitoh, President of JAAGA and Col Wardak, Chief director of A-6 Div., 5AF

All players enjoyed lunch (↑)(↓)



(←)The champion:Mr. Jarret  
 (→)Second Place:Mr. Ueda  
 (↙)Best Gross:Mr. Ueda  
 (↓)Best Gross:Mr. Seeley  
 (↘)Volunteers: Bando-san and Nakamura-san,  
 Arigato Gozaimashita!



特集

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより  
Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

【 航空輸送部門 】  
第1輸送航空隊飛行群第401飛行隊  
(401st Tactical Airlift Squadron,  
1st Tactical Airlift Wing)  
Maj Lucas G. Crouch

はじめまして。現在、航空自衛隊小牧基地で C-130H 教官操縦士米空軍要員として勤務しているルーカス・クラウチ少佐と申します。アメリカ合衆国ウィスコンシン州グリーンベイ出身です。

昨年の 5 月に小牧基地に配置されてから約1年半の月日が経ちました。飛行隊では C-130H 教官操縦士として、主に機種転換学生に対して教育を行い、部隊の能力向上に勤めています。航空自衛隊の教育法に則って教育を行いつつ、米空軍での経験を活かし、日米の違いや様々な戦術等の教育も積極的に行っており、プラスアルファの教育を心掛け、日々部隊の精強化に尽力しています。それに付け加えて米空軍と航空自衛隊の日米共同訓練等の際には、業務が円滑になるための支援も行っています。例えば、レッド・フラッグ・アラスカ、コープ・ノース・グアムなどの共同訓練ではオブザーバーとして参加し、航空自衛隊の任務遂行能力向上のために、様々なアドバイスを行ってきました。



Grandfather and Maj Crouch in Iwo-to Island

また、横田基地に所在するシスター・スコードロン(姉妹飛行隊)である米空軍第 36 飛行隊との部隊間交流においても部隊間の橋渡しとして、相互理解が深まるように支援を行っています。

一方で、私自身も航空自衛隊の運用を学び、多くを吸収しています。飛行訓練のみならず、仕事に対する考え方、取り組み方等の違いもあり、航空自衛隊と米空軍の違いを意識させられる場面が多くあります。このことは私

の視野を広げ、航空自衛隊を理解することのみならず、米空軍を客観視することに繋がり、大きなメリットとなっています。私の最終的な目標はこの勤務で得た経験を活かし、今後、航空自衛隊と米空軍との関係が更なる進化を遂げ、地域の平和と安定化に寄与することができるように支援することです。

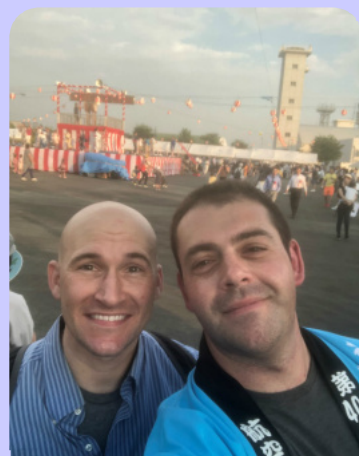


Maj Lucas G. Crouch

私は、大学を卒業後、士官となり米空軍の飛行訓練課程及び C-130E/H の機種転換訓練課程を修了し、2006 年に横田基地へ配属されました。

最初の横田基地での勤務は 2010 年までの 4 年間でしたが、私にとって人生初の国外での生活であるとともに、イラク及びアフガニスタンへの派兵や太平洋地域での多国間訓練等、様々な経験をすることができました。一方、余暇の時間は積極的に日本の文化に触れる機会を作っていました。横田に配属された当初は、日本に全く興味がありませんでした。しかしながら、様々な日本文化に触れ、日本で過ごす時間が経つにつれて、日本語や日本が持つ独特の文化に強い興味を持ち、この国で長期間勤務したいと考えるようになっていきました。

そのような思いを抱きつつあるときに偶然、前任の米空軍要員として勤務されていたビーン少佐と出会い、航空自衛隊における米空軍要員としての勤務の存在を教えられました。ビーン少佐から同勤務の目的、やりがい等



With Maj Fleissner, USAF officer working at 5th Technical School in Komaki AB



During Operation Christmas Drop



With Red Flag Alaska Crew



American pizza in Alaska

を教えてくださいました後は、航空自衛隊の米空軍要員として勤務することが私の目標の一つになりました。

その後、本国及び2回目の横田基地での勤務を行いました。常に米空軍要員として勤務するという夢を抱き続けていました。最終的にはその思いが現実のものとなり、昨年より航空自衛隊小牧基地で勤務しています。

現在勤務している第401飛行隊の隊員とはフィリピンの災害派遣の任務の際に一緒に支援したこともありました。また、2015年のOPERATION CHRISTMAS DROP (OCD)※では、第401飛行隊隊員及び現在の第401飛行隊隊長と一緒に仕事を行う機会にも恵まれました。

2015年のOCDの任務では体験搭乗として同乗しただけでしたが、昨年は米空軍要員として第401飛行隊の隊員ともにOCDに参加することができました。本当に嬉しかったです！

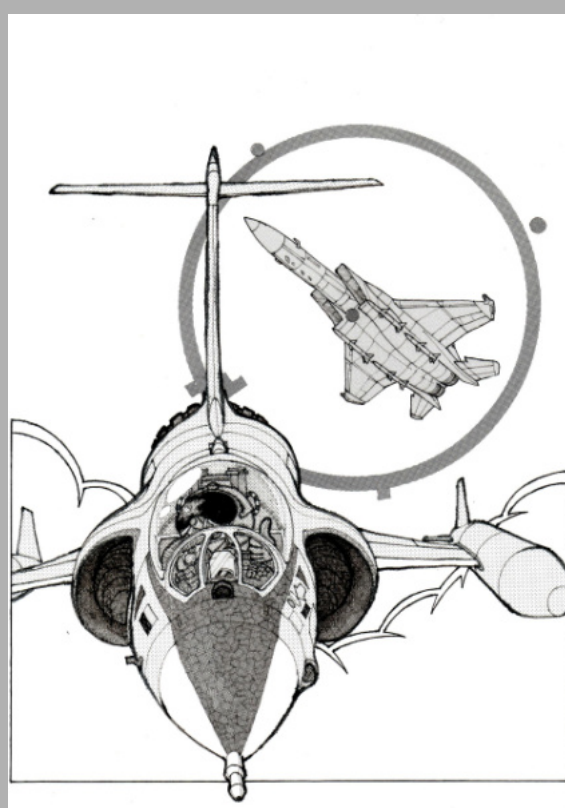
これまで述べてきたように、日本で米空軍要員として勤務することは特別な思い出がありますが、私の家族にとっても特別な思い出があります。実は、第二次世界大戦時、祖父はアメリカ陸軍航空隊として日本と戦っていたからです。私の祖父が硫黄島で戦時中に撮った写真と同じ場所で、米空軍要員として私も写真を撮りました。祖父は自分の孫が、自衛隊員と一緒に働いていることをその当時は想像できなかつたと思います。今ここで実現していることは想像ができなかつたことであるとともに、喜ばしいことであると思います。

航空自衛隊の方々とは素晴らしい経験であり、将来特別な思い出となると確信しています。また、現在の勤務は様々な方々からの支援があつて成り立っており、日々充実した勤務を行えていることに感謝しています。この機会を利用し、いつもご支援いただいている方々に感謝を述べたいと思います。ありがとうございます。

※ ミクロネシア連邦等における日米豪人道支援・災害救援共同訓練



At Komaki Air Base



「F104 vs F15」 作:富岡幹博会員

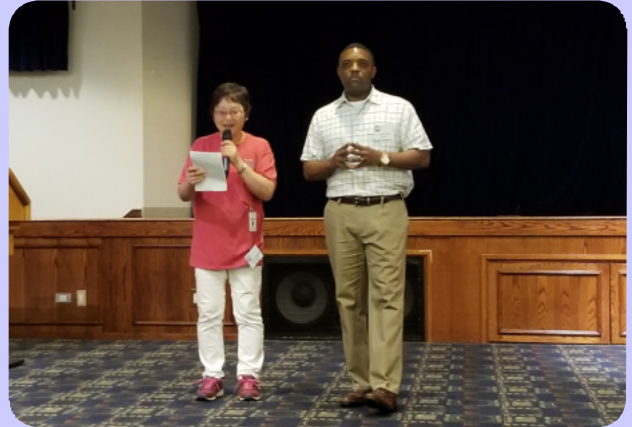
## 2019 横田基地日米友好祭が開催 Yokota Air Base opens door for the 2019 Japanese-American Friendship Festival

2019 横田基地日米友好祭が、9月14日(土)及び15日(日)の両日開催され、14日午後1時から祝賀レセプションが米空軍下士官クラブにおいて実施された。周辺自治体、協力団体、官公署の長等とともに、航空自衛隊から航空総隊司令官井筒俊司空将、同副司令官上ノ谷寛空将をはじめ、航空総隊主要幹部、近隣部隊長、横田基地司令荒木俊一1等空佐等が招待され、JAAGAからは岩本及び村田理事夫妻、並びに阪東、藤田、川口渉外理事、石川会員が参加した。

レセプションが行われた約1時間半の間、米空軍横田基地司令官ジョーンズ大佐 (Col Otis C Jones, Commander of Yokota AB) は、会場内の各テーブルを回り、各参加者と懇談を行って積極的に懇親を深めていたのが印象的であった。また、レセプションの最後にスピーチを行い、横田基地日米友好祭への参加、日頃からの支援に対して謝意を述べるとともに、「横田基地は引き続き地域との共存共栄を図るとともに、日米同盟の固い絆を確固たるものにして行く努力を継続していく」との信念を述べて、会を締めくくった。

エプロン地区の航空機展示では、横田基地所属の C-130 等の輸送機のほか、オスプレイ、グローバルホーク等の航空機が展示されていただけでなく、空自からも F-2 の 60 周年記念塗装機 (築城基地) を始めとして多数の航空機が展示されており、友好祭の盛り上げに一役買っていた。

友好祭は天候にも恵まれ、航空機の地上及び飛行展示、各種装備品展示並びにステージでの各種演奏等、



(↑) Col Jones made a speech at the reception

(↓) JAAGA members with Col and Mrs. Jones

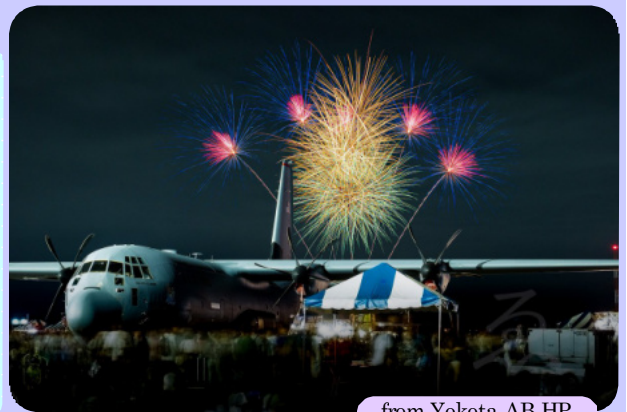


多種多様な催事の計画もあって、多数の入場者も大いに楽しみ賑わいのある友好祭となった。

(川口理事記)



At the festival, many aircrafts (of USAF and Koku-Jieitai) were on display, various shops and events attracted visitors, and the display of fireworks was the magnificent climax



from Yokota AB HP

## 寄稿募集の御案内

日米エアフォース友好協会(JAAGA)は、お蔭様で令和元年7月で創立23周年を迎えました。

日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。

『JAAGAだより』も、JAAGA活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のない意見や感想も是非お寄せいただきたくお待ちしております。

### 【連絡先】

(郵便) 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町9番7号 ZEEKS 四谷坂町ビル3F

日米エアフォース友好協会 広報係

(メール) [pubaffair@jaaga.jp](mailto:pubaffair@jaaga.jp)

## JAAGAグッズ紹介

JAAGAはこの度、広報活動の一助とするために「JAAGAグッズ(タイピン、ピンブローチ)」を作成しました。これまでの「JAAGAだより」の一部の記事は、投稿者の皆様の善意により支えられてきましたので、今後、投稿の記念としてこの「JAAGAグッズ」を謹呈しまして、その善意に少しでもお答えしたいと思っています。これからも積極的な投稿等をお願いします。

JAAGA広報理事一同



タイピン



ピンブローチ

## 新入会員紹介

### 正会員(Regular Member)

氏名	住所	氏名	住所
入木 忠一	埼玉県狭山市	田中 耕太	埼玉県入間市
鎌田 修一	埼玉県朝霞市	今瀬 信之	千葉県千葉市
武藤 茂樹	埼玉県入間市	兵頭 修次	愛媛県八幡浜市
岡本 兼一	東京都府中市	平元 和哉	埼玉県川口市
山田 真史	千葉県我孫子市	池田 靖	東京都北区

### 個人賛助会員(Individual Associate Member)

氏名	住所	氏名	住所
田中 正男	沖縄県沖縄市	銘苺 徳人	沖縄県浦添市
高畑 ありさ	東京都八王子市	岩 始	埼玉県川口市
青木 知幸	東京都中央区	吉増 弾司	東京都あきる野市

## 会 員 募 集

- 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 10 名、個人賛助会員 6 名の合計 16 名の入会を得ることができました。
- 1.11.30 現在、正会員数 259 名、個人賛助会員数 93 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 36 社となっております。
- 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。  
推薦若しくは情報提供を頂いた方には、直接会員担当理事から連絡させていただきます。

### 【入会資格】

正 会 員：航空自衛隊の OB

賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

### 【連絡先】

郵 便：〒160-0002

東京都新宿区四谷坂町 9-7 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 会員係

メール：membership@jaaga.jp

## 【 編 集 後 記 】

◇令和元年・・・。脈々と続く日本の歴史、大きな時代の流れを感じた年であったのではないのでしょうか。相次ぐ大規模自然災害、様々な社会問題、安全保障上の懸念等、決して平穏な 1 年とは言えませんでした。明るい話題や勇気づけられる光景も数多く見られました。そんな中、航空自衛隊、米空軍の現役の皆さんが昼夜を分かたず多種多様な任務を遂行されていることに、大いなる安心感と信頼感を覚えます。

◇JAAGA は、「航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に寄与する事業を推進し、日米両国の信頼関係の向上に貢献する」ことを目的としています。JAAGA だよりは、そのような JAAGA の活動・想いを広く知っていたため、正しいことを正しく伝えることに徹し、発信して参ります。

◇だより 57 号も、盛りだくさんの内容となりました。執筆者である本部役員、三沢・沖繩両支部役員、投稿して下さった航空自衛隊、米空軍の皆さん、情報提供して下さった航空自衛隊、第 5 空軍に、編集者として感謝申し上げます。

◇「つばさ会 / JAAGA 訪米団」の報告記事では、JAAGA の目的に直結した活動が紹介され、横田基地研修参加者の所感文からは、賛助会員の皆さんの国防に対する意識、現役の皆さんを理解しサポートする意識が強く感じられます。また、日米相互特技訓練の記事では、航空自衛隊の准曹士隊員、米空軍の下士官が互いを尊重しながら切磋琢磨する様子が、そして米空軍士官学校留学生の日光研修記事では、留学生の視野の拡大、地元高校生との交流の状況も紹介されています。地元高校生にとっても留学生との交流が将来への動機付けになっていることを、申し添えたいと思います。

◇令和 2 年は、いよいよ東京オリンピック・パラリンピック、航空観閲式の年です。また、小惑星リュウグウで世界初の数々のミッションを無事終了した「はやぶさ 2」が、地球に帰還する予定です。どんな 1 年になるのでしょうか。

◇今号の挿絵は、宇山佳男 OB から雪景色の金閣寺、富岡幹博会員から「F104 vs F15」、そして山本康正会員から亥年から子年にバトンをつなぐ「日々笑進」を寄稿していただきました。

ありがとうございました。

(編集子)

作:山本康正会員



JAAGA だよりは、JAAGA ホームページからもご覧頂けます(創刊号から第 49 号までは、「20 年の歩み」に掲載しています)。